

一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV

鳥取県東伯郡泊村

SONONISIKAWA

園 西 川 遺 跡

SONO

園 7 号 墳

HARA

原 第 2 遺 跡

1993

財團法人 鳥取県教育文化財団

建設省 倉吉工事事務所

## 正 誤 表

一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV

ページ	行	誤	正
6	30	* 目久美遺跡	* 目久美遺跡
6	36	* 土 墓	* 土壤墓

## 序

泊村は、古くから遺跡の宝庫として知られています。宇谷第1遺跡をはじめとする集落跡や古墳はもとより、小浜字池ノ谷出土の銅鐸・石鰲2号墳（尾尻古墳）の銅鏡などの遺物も有名です。

当財団では、このような遺跡地帯の一部を、昨年度にひきつづき建設省の委託を受け、「一般国道9号（羽合道路）改築工事に伴う発掘調査」として、行いました。

その結果、県内有数の規模を誇る円墳などが発掘されました。これらは、郷土の歴史を解き明かしていくうえで貴重な資料です。今回、調査成果を報告書にまとめ刊行することができました。

本報告書が教育および学術研究のため広く活用され、歴史の解明の一助になればと期待するとともに、文化財に対する理解や認識がより深まり、その成果が永く後世に伝えられれば幸いです。

最後に、建設省倉吉工事事務所ならびに交通の不便な所にもかかわらず調査に参加してくださった地元の方々をはじめ、ご協力いただいた方々、その他関係各位に対して心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

## 序 文

建設省が管理する一般国道9号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）まで76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに東伯郡羽合町及び泊村地内において、将来の国土開発幹線道路として当面、活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である羽合道路の整備を進めています。

羽合道路は、泊村原地内でインターチェンジにより現道9号及び①倉吉青谷線とアクセスし、羽合町長瀬でインターチェンジによって北条道路一般部とアクセスしますが、途中東郷湖が見渡せる位置にサービスエリアが予定されている延長6kmの県中部地方ではじめての高規格道路で、昭和61年度に国道9号のバイパス事業として事業に着手しましたが、63年度に高規格な機能を持たすよう構造変更を行い、同年用地買収に着手しました。平成2年度からは、羽合高架橋下部工事に着手し、今年度は下部工を完了し、上部工に着手しました。

このルートには、全部で10か所の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い記録保存を行うこととなりました。

このうち泊村地内では、「園7号墳」（報告書園西川遺跡、園7号墳）「原第2遺跡」（報告書原第2遺跡）の2か所について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査が行われました。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持っていることに御理解いただければ幸い存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成5年3月

建設省 倉吉工事事務所長

岡 田 清 彦

## 挿 図 目 次

挿図 1	園西川遺跡・図 7 号墳と道路建設ルート	3
挿図 2	原第 2 遺跡と道路建設ルート	3
挿図 3	泊村の位置	5
挿図 4	周辺遺跡分布図	7
挿図 5	園西川遺跡 S K01 造構図	10
挿図 6	園西川遺跡・図 7 号墳調査前地形測量図	11・12
挿図 7	園西川遺跡造構全体図	13・14
挿図 8	園西川遺跡 S K02 造構図	15
挿図 9	園西川遺跡 S K03 造構図	16
挿図 10	園西川遺跡 S K03 出土遺物実測図	16
挿図 11	園西川遺跡 S K04 造構図	16
挿図 12	園西川遺跡 S K05 造構図	17
挿図 13	園西川遺跡 S K05 出土遺物実測図	17
挿図 14	園西川遺跡 S K06 造構図	18
挿図 15	園西川遺跡 S K06 出土遺物実測図	18
挿図 16	園西川遺跡 ピット群出土遺物	18
挿図 17	園西川遺跡造構外遺物実測図	18
挿図 18	図 7 号墳填丘測量図	20
挿図 19	図 7 号墳盛土除去後平面図	20
挿図 20	図 7 号墳主体部造構図	21・22
挿図 21	園 7 号墳主体部・擾乱坑造構図	21・22
挿図 22	盛土内板石出土状況土層断面図	21・22
挿図 23	図 7 号墳土層断面図	23・24
挿図 24	図 7 号墳周溝内埋葬施設造構図	25
挿図 25	図 7 号墳表土中出土遺物実測図	26
挿図 26	図 7 号墳盛土中出土遺物実測図	26
挿図 27	図 7 号墳旧表土中出土遺物実測図	26
挿図 28	原第 2 遺跡調査前地形測量図	27・28
挿図 29	原第 2 遺跡造構全体図	29・30
挿図 30	原第 2 遺跡 S K01 造構図	31
挿図 31	原第 2 遺跡 S K01 出土遺物実測図	31
挿図 32	原第 2 遺跡 S K02 造構図	32
挿図 33	原第 2 遺跡溝状造構・段状造構造構図 土層断面図	33
挿図 34	原第 2 遺跡造構外出土遺物実測図	35

## 挿 表 目 次

挿表 1	園西川遺跡出土土器観察表	37
挿表 2	園西川遺跡鉄器観察表	38
挿表 3	図 7 号墳出土土器観察表	38
挿表 4	原第 2 遺跡出土土器観察表	38

## 図 版 目 次

図版 1	図 7 号墳・園西川遺跡調査前(北西上空より) 園西川遺跡先掘状況(北上空より) 園西川遺跡 S K01 先掘状況(北東より) 園西川遺跡 S K02 先掘状況(北より)	
図版 2	園西川遺跡 S K03 先掘状況(西より) 園西川遺跡 S K04 先掘状況(西より) 園西川遺跡 S K05 遺物出土状況(北西より) 園西川遺跡 S K05 先掘状況(北西より)	
図版 3	園西川遺跡 S K06 先掘状況(南より) 園西川遺跡 ピット群先掘状況(南西上空より) 図 7 号墳調査前(北より) 図 7 号墳先掘状況(西より)	
図版 4	図 7 号墳主体部先掘状況(西より) 図 7 号墳周溝内埋葬施設先掘状況(南より) 図 7 号墳断ち割り盛土状況(南より) 図 7 号墳断ち割り盛土状況(西より)	
図版 5	図 7 号墳盛土内板石出土状況(南東より) 図 7 号墳盛土内板石出土状況(南西より) 図 7 号墳盛土内板石出土状況土層断面 (b-b'ライン)(西より) 図 7 号墳旧表土面検出状況(南より)	
図版 6	原第 2 遺跡調査前(北上空より) 原第 2 遺跡先掘状況(南上空より) 原第 2 遺跡先掘状況(北より) 原第 2 遺跡 S K01 先掘状況(北より)	
図版 7	原第 2 遺跡 S K02 先掘状況(西より) 原第 2 遺跡 S S01 先掘状況(西より) 原第 2 遺跡 S S01 調査区南際土層断面(北より) 原第 2 遺跡 S S02 先掘状況(西より)	
図版 8	園西川遺跡 S K03 出土遺物 園西川遺跡 S K05 出土遺物 図 7 号墳出土遺物 原第 2 遺跡 S K01 出土遺物 原第 2 遺跡造構外遺物	

# 目 次

序 文  
序 言  
凡 例  
目 次

第 1 章 調査の経緯	
第 1 節 調査に至る経緯 .....	(米田) 1
第 2 節 調査の経過と方法 .....	(米田) 1
第 3 節 調査体制 .....	(米田) 4
第 2 章 位置と環境	
第 1 節 地理的環境 .....	(岸本) 5
第 2 節 歴史的環境 .....	(牧本) 6
第 3 章 園西川遺跡・園 7 号墳の調査	
第 1 節 園西川遺跡・園 7 号墳の概要 .....	(牧本) 10
第 2 節 園西川遺跡の調査結果 .....	(牧本) 10
第 3 節 園 7 号墳の調査 .....	(牧本) 19
第 4 章 原第 2 遺跡の調査	
第 1 節 原第 2 遺跡の概要 .....	(岸本) 31
第 2 節 原第 2 遺跡の調査結果 .....	(岸本) 31
第 5 章 造構・遺物の検討	..... (牧本) 35
むすびにかえて .....	36
註・参考文献 .....	37
遺物観察表 .....	37・38
写真図版	

## 凡　　例

1. 発掘調査時における遺構番号と報告書の番号は、基本的に一致する。

2. 本報告書における遺構記号は次のように表す。

S K : 土坑・土壤 S S : 段状遺構 P : ピット

3. 本報告書における実測図は、基本的に下記の縮尺で掲載した。

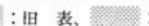
(1) 遺構図—古墳：1/200、主体部：1/40、周溝内埋葬：1/30、土坑・土壤：1/30

溝状遺構：1/60・1/400、段状遺構：1/60・1/400、ピット群：1/200

(2) 遺物実測図—土器：1/3、鉄器1/2

4. ピットの規模は（長径×短径×深さ）cmで表した。墳丘の規模は、墳端（裾部）までの計測値を用いた。

5. 遺構図における表示は以下の通りである。

 : 旧 表、 : 赤色塗彩

6. 本報告書における遺物記号は次のように表す。

Po : 上器・土製品 F : 鉄製品

7. 土器実測図のうち、弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器は断面黒塗りで表現した。遺物実測図中における記号は以下の通りにする。

→ : ケズリの方向（砂粒の動きで判断した）

●Po : 床面出土土器

8. 遺物には、遺跡名・遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に記載した。遺跡名は次の略号を用いた。原第2遺跡=HR2、園西川遺跡=SN。実測した遺物については、実測者の頭文字を使った実測者番号（KR-1、NA-1等）を2×5mm程度のシールに記し、それを個体ごとに貼り付け、実測原図にもその番号を記した。

9. 遺物観察表については以下の通りとする。

(1) 法量の欄の番号は次の通りとする。

①口径②器高③胴部最大径④底部径⑤複合口縁立ち上がり長⑥須恵器杯蓋稜径⑦須恵器杯蓋口縁高⑧須恵器杯身基部径⑨須恵器杯身立ち上がり長である。その他の計測値については、その都度計測位置を記載した。また、実測の際に復元した計測値には、数値の後に▲印、残存値は同様に△印を付した。

(2) 手法の欄に記載されている成形・調整・施文の方向は、実測図で表された方向である。

(3) 備考欄に記載してあるKR-1等の番号は実測者番号である。

## 例　　言

1. 本報告書は、1992年度一般国道9号（羽合道路）改築工事に伴う泊村大字園地区（園西川遺跡・園7号墳）、泊村大字原地区（原第2遺跡）の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本報告書に収載した園7号墳、原第2遺跡は周知の名称であるが、園西川遺跡は新発見の遺跡の為、大字と小字名を並べて命名したものである。
3. 本報告書に収載した遺跡の所在地は、園西川遺跡・園7号墳が泊村大字園字西川、原第2遺跡は泊村大字原字池田である。
4. 本報告書で示す標高は建設省センター杭を使用し、園西川遺跡・園7号墳はNo40+60（X:-55001.3033、Y:-36060.9417）、49.109m、原第2遺跡はNo55（X:-55108.1117、Y:-37369.3395）、18.187mを起点とする標高値で方位は磁北である。X:、Y:は国土座標第5系である。
5. 本報告書に記載の地形図は国土地理院発行の1/50000 地形図「青谷・倉吉」、調査区位置図は泊村の1/2500地形図「地区再編農業構造改善事業計画樹立現況平面図5」を使用した。
6. 本報告書の作成は調査員の討議に基づくものである。  
報告書本文については調査員が分担して執筆し、執筆担当者名は目次に記載した。  
押印のうち、遺構実測は調査員、補助員の分担、及び業者委託して行なった。  
遺構の浄写は中部埋蔵文化財調査事務所で、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行なった。  
遺構写真は発掘担当調査員が、遺物写真は岸木・牧本が撮影した。  
本書の編集は米田が行なった。
7. 出土遺物、図面、スライド等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。ただし、出土遺物は将来的に泊村教育委員会に移管する予定である。
8. 現地調査および報告書作成にあたって、下記の方々に指導助言・協力して頂いた。

久保 積二郎、 中野 知照、 山田 志伸

(五十音順、敬称略)

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

**羽合道路** 烏取県中部地域の交通混雑緩和を図るために、1973年より一般国道9号改築工事として北条バイパスの建設が進められ、1990年11月に全面開通した。さらに、この工事の一環として羽合道路が1986年度に自動車専用道路として都市計画決定され、事業に着手し、その後、1988年度に高規格道路として計画変更された。この道路は、現道9号の泊村園地内のインターチェンジから、羽合町長瀬のインターチェンジを抜け北条バイパスに結ぶものである。

**周辺遺跡** また、計画地内とその周辺は橋津・南谷・宇野（羽合町）、園（泊村）などの古墳群、南谷遺跡・乳母ヶ谷遺跡（羽合町）、宇谷第1遺跡・原第2遺跡（泊村）などの土器の散布地が丘陵上に存在し、文化財の宝庫である。

**試掘調査** この状況の中で、このように多くの遺跡が密集している地域でもあり、建設に先立って計画地内の造構・遺跡の広がりを確認する必要性が生じた。そして、1988年度には<sup>1)</sup>泊村教育委員会が、それぞれ国庫補助事業として各丘陵の尾根を中心に試掘調査を行なった。その内、今年度調査にかかるわ泊村育委員会の調査結果においては、原第2遺跡で造構は確認されなかつたが、T17より、土師器片と繩文土器等が出土し、周知の遺跡でもあることから、造構の存在が考えられる。園7号墳は周知の古墳であり、試掘のT25によって、園7号墳の東側に造構が広がらないことを確認した。

**調査計画** これを受けて、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、財團法人鳥取県教育文化財団に記録保存のため事前調査を委託した。これによって当文化財団が調査計画を作成し、それに基づき、中部埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を担当することになった。今年度は園7号墳1400m<sup>2</sup>、原第2遺跡1992m<sup>2</sup>、宇谷第1遺跡300m<sup>2</sup>を調査する予定であったが、宇谷第1遺跡は計画変更で調査が中止となり、園7号墳1383m<sup>2</sup>、原第2遺跡1907m<sup>2</sup>に変更になった。

期間は1992年4月～1993年3月と予定された。

**調査予定** 来年度は、南谷大山遺跡（ハ）の調査が予定されている。

## 第2節 調査の経過と方法

**園7号墳** 泊村教育委員会の行なった試掘調査の結果より、東側に造構が広がらないことを想定したが、調査区西側への造構の広がりと周溝範囲が確認されていなかった。

本調査にかかるにあたって、業者に委託して調査前地形測量を行なった。そして、セスナ、ラジコンヘリコプターによる調査前の航空写真を撮った。次に、地区設定は園7号墳の墳頂のE2杭を中心にして、墳丘の主軸方向にのるよう、10mグリッドを設定した。E2杭の国土座標値は(X:-55017.480 Y:-35966.399)となった。基線は東西方向を西からA～Gとし、南北方向を北から1～5と設定した。東西、南北のそれぞれの基線の交点を杭名とした。

調査は、4月6日より発掘用具の搬入を行い、まず、西側での造構の広がりを確認するために、4本のトレンチを設定して掘り下げた。その結果、調査区の西側への造構の広がりがないことを確認した。

また、園7号墳の調査は、周溝の範囲を確認するため、8本のトレンチを設定し、掘り

下げるところから始めた。園7号墳の墳丘上からその周辺は竹林で、竹の根の除去が人力だけでは困難であったため、調査をスムーズに進められるように、周溝の範囲の外側は重機を使用して表土剥ぎし、排土は西側斜面と北側斜面に捨てた。その際、周辺に排土が流れ出さないように土留め柵を設置した。

調査の結果、古墳だけでなく、土坑類も検出した。特に、園7号墳の墳丘断面後方の墳丘下で弥生時代後期後半の土坑が検出された。これによって、園7号墳の周辺にある遺構の遺跡名を園西川遺跡とした。最後に、最終遺構写真撮影をし、全体遺構図を作成して、6月18日に園西川遺跡・園7号墳の調査を終了した。

**原第2遺跡** 原第2遺跡でも、泊村教育委員会が4本のトレンチの試掘調査を行なっており、このうち遺跡のT17から土師器片に混じって、縄文土器が出土している。

本調査にかかるにあたって、業者に委託して調査前地形測量を行なった。そして、セスナによる調査前の航空写真を撮った。次に、地区設定は建設省道路センター杭No55(X:-55108.112, Y:-37369.340)とNo55+40(X:-55127.127, Y:-37404.529)の2本の杭を結ぶ線を東西軸の基線とし、この基線上をセンター杭No55+40を中心に、10mに区切り、グリッドを設定した。基線は東西方向を西からA~Kとし、南北方向を北から1~5と設定した。東西、南北のそれぞれの基線の交点を杭名とした。従って、センター杭No55+40はC3杭、センター杭No55はG3杭となった。

調査は重機による表土剥ぎから始めたが、畑の段による起伏が大きかったこと、排土位置が離れていたことで作業が難航した。また、周囲に道路があり、排土するスペースが狭かっただので、重機とキャタピラトラックを使用して南西側の用賀地に搬出し仮置きした。人力による排土も、ベルトコンベアを使用し、作業の能率化をはかった。

調査結果は段状の遺構、縄文時代前期頃の土坑を検出した。最後に、最終遺構写真撮影をし、全体遺構図を作成して、6月5日に原第2遺跡の調査を終了した。

#### 調査日誌抄(泊村報告書) 1992年

4月6日 園西川遺跡・園7号墳、  
古墳供養、調査開始  
4月13日 園7号墳表土剥ぎ  
4月20日 園7号墳表土剥ぎ  
4月27日 原第2遺跡、調査開始  
5月6日 園7号墳、周溝掘り下げ開始  
5月20日 園7号墳主体部石棺内完掘  
原第2遺跡SK01完掘  
5月26日 園7号墳断面開始

5月30日 園西川遺跡・園7号墳遺跡、  
現地説明会  
6月1日 園西川遺跡SK04完掘状況写真  
6月5日 原第2遺跡、調査終了  
6月15日 園西川遺跡SK05、  
土器出土状況実測  
6月18日 SK05・SK06ビット群実測、  
写真終了  
園西川遺跡・園7号墳遺跡、  
調査終了



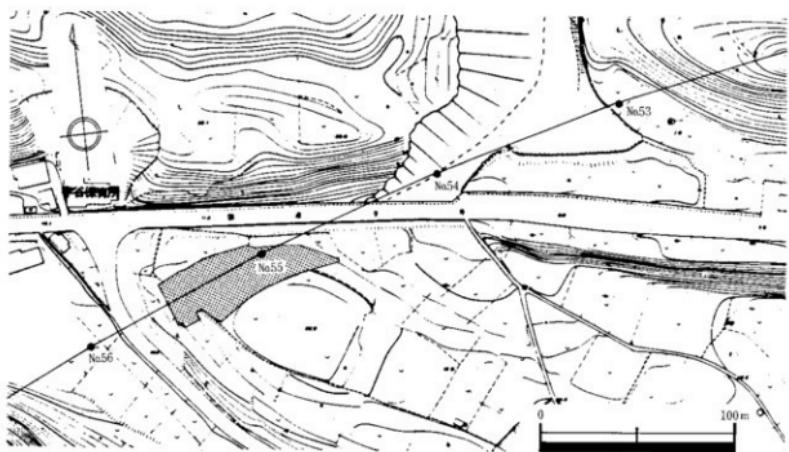
写真1 園西川遺跡重機剥ぎ作業



写真2 園7号墳調査風景



挿図1 園西川遺跡・圓7号墳と道路建設ルート



挿図2 原第2遺跡と道路建設ルート

### 第3節 調査体制

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもとに下記の体制で実施された。

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	西尾邑次（鳥取県知事）
副理事長兼常務理事	坂田昭三
事務局長	若松良雄
財団法人鳥取県教育文化財団	埋蔵文化財センター
所 長	土井田憲治（鳥取県教育委員会文化課長）
次 長	山根豊己
調査指導係長	田中弘道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）
庶務係長	山根夏男（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）
○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団	中部埋蔵文化財調査事務所
所 長	入江輝三
主任調査員	米田規人
調査 員	牧本哲雄・岸本浩忠
調査補助員	山根雅美・岩本尚子

○調査協力

下記の方々に発掘調査作業員、整理作業員として協力していただいた。

青木輝明、朝倉郁雄、池原美代子、市橋貴志子、伊藤恵美子、稻垣美智恵、伊藤義輝、  
入江淑恵、岩室紀男、植原昭典、浦木伊都子、大鳴貞夫、大鳴由起枝、奥田和美、  
表 明美、勝田美登里、上本明子、河口智津子、吉川久子、木戸孝行、倉益和美、  
藏本重信、桜井きみ子、佐藤 亮、鳴崎久子、清水房子、杉原光雄、杉村秀吉、  
陶山勝利、高浜新策、竹田 肇、竹本富美代、谷本美智恵、高浜とし子、津嶋時三、  
田中和子、角田磨智子、中田 都、中原千恵、中村晶宏、中村勝恵、中村博子、  
西垣吟枝、西本てる子、野崎悦子、浜口みち子、林 博、福田延子、福田弥千代、  
藤田広子、藤田恭人、藤原秀子、前條一重、前 宮子、前田二三枝、真壁 均、  
松井久雄、松田悦雄、松岡朋子、松田澄子、松田 昇、松本美重、松本美佐子、  
光井芳子、村口いつ子、森脇幸子、安田成行、山崎定雄、山田暉美、山本久美恵、  
山本清子、吉村綾子、若杉道子、（五十音順、敬称略）



写真3 発掘調査参加者一同

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

**鳥取県** 鳥取県は本州の西部、中国地方の北東部に位置する。北は日本海、東は兵庫県、南は標高1200mを越える中国山地を県境として岡山県・広島県、西は島根県と接する。鳥取県の県域は東西126km、南北61.85km、面積349.269km<sup>2</sup>で、日本全体の約1%を占める。鳥取県は鳥取市を中心とする東部、倉吉市を中心とする中部、そして米子市・境港市などからなる西部の三地域に分けられる。各地域とも地勢は山がちで、山地が県総面積の86.3%を占める。それぞれの地域には千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）の県下を代表する河川が流れ、その下流域に東部の鳥取平野、中部の倉吉・北条・羽合平野、西部の米子平野が発達している。また各平野の海岸線には鳥取平野の鳥取砂丘、北条・羽合平野の北条・長瀬砂丘、米子平野の弓が浜半島などの砂丘、砂州が発達している。その中でも代表的なものは鳥取砂丘で、東西長15km、南北幅最大2kmの規模を持つ。<sup>(2405)</sup>

**泊 村** 泊村は鳥取県の中央部を占める東伯郡の東端に位置し、東は気高郡青谷町、西は東伯郡羽合町、南は東郷町に接し、北は日本海に面している。人口約3400人、面積15.5km<sup>2</sup>の村である。地形は、中国山地より北方に伸びた100~300mの低平な山地が海浜まで迫っており、平地が少ない。分岐した尾根と尾根の間を流れる小河川沿岸には、水田化された小平野が見られる。海岸線は砂丘と岩石海岸からなっており、いくつかの漁港がある。

**調査地域** 圖7号墳・園西川遺跡は、泊村園の砂丘地に近い、標高約45mのほぼ東西に延びる丘陵上にある。水田面からの比高は、約44mである。この丘陵は、現在国道9号によって分断されている。

一方、原第2遺跡は、同村原の西端、同村宇谷との境界付近の標高約20mの丘陵上のはば南北に延びる低丘陵上にある。水田面からの比高は、約12mである。

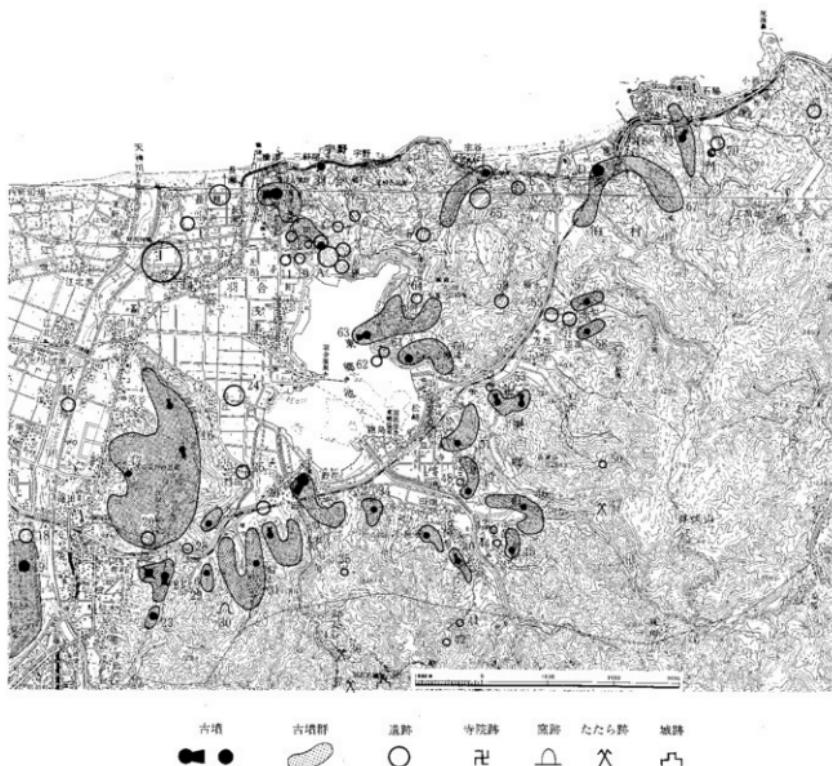
いずれの調査区も海岸部に近く、北側は砂丘地になっている。



挿図3 泊村の位置

## 第2節 歴史的環境

- 旧石器** 東郷池周辺に限らず鳥取県において遺構を伴う旧石器遺跡は確認されていないが、大山山麓の丘陵上でいくつかの旧石器が見つかっている。中部地区では、関金町野津三の黒曜石製ナイフ型石器、倉吉市和田の石刃、倉吉市上神・鶴の細石刃石核、倉吉市国府の搔器、倉吉市中尾遺跡の国府型のナイフ型石器などである。このうち、野津三のナイフ型石器・中尾遺跡のナイフ型石器は県下では唯一のローム層中の発見であり、大変貴重なものである。
- 縄文時代** 縄文時代早創期に盛行するとされる隆線文土器群は県内では発見されていないが、石器類は二十数カ所で確認されている。中部地区では、有茎尖頭器が大栄町穂波・東伯町櫻下・関金町征ヶ平などで見つかっている。やはり大山山麓の丘陵上での発見である。早期でも丘陵・古地上に遺跡が確認されている。倉吉市取木遺跡では堅穴住居跡・炉跡・押型文の深鉢などが見つかっている。東郷池周辺においても、南谷19号墳(1)の旧表下より安山岩製のスクレイバーが見つかっており、縄文時代人が海岸部の丘陵上にも足跡を残していたことが窺える。
- 前期** 前期になると気候が温暖になり海進が進み、この地域では広いラグーンが形成され、この周辺で遺跡が確認されるようになる。北条町島遺跡は、前期から晩期の貝塚を伴う遺跡で、土器のほかに石器、丸木舟、貝、人骨、動物骨が検出されている。丸木舟は県内でも数例知られるに過ぎず、貴重なものである。また、花粉分析の結果や貝の種類から古環境の変化の様子を復元することができるようになった。中期の遺跡は、倉吉市平ル林遺跡、北条町船渡遺跡、羽合町南谷ヒジリ遺跡(B)などが知られるにすぎず、遺跡の密度も少ない。後期になると遺跡の数は増加し、倉吉市津田峰遺跡・東伯町森藤第2遺跡・関金町横峰遺跡ではこの時期の住居跡が見つかっている。これらの住居の中央には、石組の炉が作られている。この周辺では、倉吉市天神川下流遺跡、東郷町北福第3遺跡(56)で磨光縄文土器などが表採されている。
- 中期** は復元することができるようになった。中期の遺跡は、倉吉市平ル林遺跡、北条町船渡遺跡、羽合町南谷ヒジリ遺跡(B)などが知られるにすぎず、遺跡の密度も少ない。後期になると遺跡の数は増加し、倉吉市津田峰遺跡・東伯町森藤第2遺跡・関金町横峰遺跡ではこの時期の住居跡が見つかっている。これらの住居の中央には、石組の炉が作られている。この周辺では、倉吉市天神川下流遺跡、東郷町北福第3遺跡(56)で磨光縄文土器などが表採されている。
- 後期** いる。晩期では、倉吉市松ヶ坪遺跡で配石墓、土器棺墓、土壙が見つかっている。なかでも、土器棺墓は県内においても岸本町林ヶ原遺跡とここにしか見つかっておらず、この時期の葬制を知る貴重な資料である。長瀬高浜遺跡では刻目突帯文土器、北条町北尾遺跡でもこの時期の土器を出土している。時期ははっきりしないが、東郷町別所第2(41)・第6遺跡(42)、福永第3遺跡(59)、野花第2遺跡(35)、白石第1遺跡(50)でも縄文土器が表採されている。泊村宮の山遺跡(70)では、漁撈具としての石錐が見つかっており、縄文人が海や湖で盛んに魚を獲っていたことが想像される。
- 弥生時代** 大陸から伝播した稻作は、日本列島をかなりの速さで北上したと考えられ、鳥取県でも前中期には米子市久美遺跡で水田跡が確認されている。東郷池周辺では水田跡は確認されていないが、稲作に伴う遺物が各所で見つかっており、弥生時代水田の調査が行われるもの近いものと思われる。この時期には、天神川の沖積作用と日本海からの風によって形成された砂丘上に、長瀬高浜遺跡(14)が現われる。この遺跡は弥生時代前期から中世までの複合遺跡であるが、この時期の遺構には4棟の玉作工房跡のほか、土壙墓などがある。玉作工房跡は日本でも最も古いものの一つである。
- 中期** 長瀬高浜遺跡では中期の土壙がわずかに見られるが、後期の遺構は全く見られず、古墳時代に入ってからが最も栄える。東郷池周辺では、この時期の遺跡は長瀬高浜の土壙墓を除いては確認されておらず、遺跡の密度が少なくなっている。かわりに、丘陵上での遺跡の密度が増すと推定される。
- 後期** 後期においても同様の現象が見られ、焼失住居が見つかった倉吉市福庭遺跡(20)、炭化米・



挿図4 周辺遺跡分布図

- A 南谷大山遺跡 B 南谷ヒシリ遺跡 C 南谷22号墳・南谷古墳群 D 園7号墳・園西川遺跡 E 原第2遺跡  
 1 南谷19号墳・南谷夫婦塚遺跡 2 南谷大ナル遺跡 3 乳母ヶ谷第2遺跡 4 淀古墳 5 宇野第1遺跡  
 6 宇野第4遺跡 7 宇野第5遺跡 8 橋津(馬ノ山)4号墳 9 乳母ヶ谷遺跡 10 南谷遺跡 11 南谷貝塚  
 12 和助北遺跡 13 橋津台場 14 長瀬高浜遺跡 15 天神川下流遺跡 16 大平山古墳群 17 福庭古墳  
 18 小田銅鐸出土地 19 向山古墳群 20 福庭遺跡 21 山根古墳群 22 藤和塚丘墓 23 伊木古墳群 24  
 脂ヶ坪遺跡 25 門田遺跡 26 津浪遺跡 27 片平4号墳 28 佐美遺跡 29 佐美古墳群 30 植見中ノ谷古窯跡  
 31 塙見古墳群 32 長和田古墳群 33 野花北山1号墳 34 引地古墳群 35 野花第2遺跡 36 羽衣石第1生産遺跡 37 羽衣石第2生産遺跡 38 羽衣石城跡 39 小鹿谷古墳群 40 別所古墳群 41 別所第2遺跡  
 42 別所第6遺跡 43 高辻第1遺跡 44 高辻第3遺跡 45 高辻古墳群 46 川上古墳群 47 川上生産遺跡  
 48 久見古瓦出土地 49 久見古墳群 50 白石第1遺跡 51 中興寺古墳群 52 野方第3遺跡 53 野方・弥陀ヶ平廃寺 54 野方古墳群 55 北福第1遺跡 56 北福第3遺跡 57 北福古墳群 58 漆原古墳群 59 福永第3遺跡 60 藤津古墳群 61 大鼻遺跡 62 船隱遺跡 63 宮内狐塚古墳 64 伯耆一宮經塚 65 宇谷第1遺跡  
 66 宇谷古墳群 67 國古墳群 68 河口城跡 69 石脇2号墳(尾尻古墳) 70 宮の山遺跡 71 堀勾玉出土地  
 72 池ノ谷銅鐸出土地

貝殻などを包蔵する4基の貯藏穴が見つかった大鼻遺跡(61)、豊穴住居が調査された南谷ヒシリ遺跡(B)・南谷人穴遺跡(2)・南谷夫婦塚遺跡(1)・乳母ヶ谷遺跡(9)・乳母ヶ谷第2遺跡(3)・南谷人山遺跡(A)・宇谷第1遺跡(65)など、丘陵上の遺跡の密度が増加する。低地においては、和助北遺跡(12)で祭祀関係の土器と思われる、赤色塗彩された脚付注口土器が見られるのみである。この地域は銅鐸の出土例が多く、倉吉市小田(18)で2口(外縁付鉢II式・扁平鉢式)、北福第1遺跡(55)・長瀬高浜遺跡で小銅鐸がそれぞれ1口、泊村池ノ谷(71)で2本の舌とともに1口(外縁付鉢I式)、北条町米里で1口(外縁付鉢式)、やや離れて東伯八橋(14)で1口(扁平鉢式)が見つかっている。そのほかにも、伝伯耆国とされるもの1口(外縁付鉢I式)がある。東伯者においては、弥生時代における集団墓から卓越した倉吉市阿弥大寺1~3号墓、藤和墳丘墓(22)などの四隅突出型弥生墳丘墓が計4基存在する。

**古墳時代** 主な前期古墳には、三角縁神獸鏡を含む多数の副葬品をもつ、復元全長100mを測る前方後

**前 期** 墓である橋津(馬ノ山)4号墳(8)がある。橋津4号墳を含む24基からなる橋津古墳群のうち22基は、国の史跡に指定されている。さらにこの古墳群には橋津2号墳などの大型前方後円墳が築造され、東郷池周辺だけではなく広く東伯者一帯を支配した集団の存在が想定できる。また、泊村には小規模な前方後円墳ではあるが彷彿縁神獸帶鏡をもつ石脇2号墳(尾尻古墳)(69)がある。北条町には土下古墳群・曲古墳群など前期から後期にかけての古式群集墳がある。橋津古墳群を仰ぎ見る砂丘に立地する長瀬高浜遺跡において、160数棟の豊穴住居、40棟の掘立柱建物をもつ大集落が再び現われる。この集落は前期から中期にかけて營造されているが、中期の中頃にはその規模も縮小している。集落が廃絶されると古墳が築造されるようになる。また、性格は不明であるがおびただしい数の器財型埴輪群が見つかっている。他に、刀状木製品・火きり白・彩色礫・手捏ね土器など祭祀に伴う遺物が出土している津浪遺跡(26)が知られている。この時期の住居跡は、佐美古墳群において4号墳に切られたかたちで検出されたもの(29)など、丘陵上でも確認されている。

**中 期** 橋津4号墳以後もこの地域では、東郷池の東岸には全長90mを測る前方後円墳である宮内狐塚古墳(63)、南岸には山陰最大級の規模を誇る全長110mを測る前方後円墳である野花北山1号墳(33)と大型前方後円墳が累々と築造される。このように、墳丘規模及び内容で他の古墳をはるかに凌駕する古墳が存在する東郷池周辺は、古墳時代前期から中期にかけて東伯者を中心的な地域であると考えられる。中期後半の集落は、南谷大山遺跡(A)のように丘陵上に営まれていると考えられる。この地域は子持勾玉の出土が多く、東郷町高辻第1遺跡(43)1例、泊村堀(71)1例、倉吉市でも2例が知られている。

**後 期** 後期になると大型の前方後円墳は見られなくなるが、中小規模の前方後円墳が各古墳群においても見られるようになる。また、從来の豊穴系の埋葬施設に代わって、横穴式石室が採用される。片平4号墳(27)は基底部を箱式石棺状に組み、板石を持ち送りながら小口積みにするもので、東伯者では倉吉市大宮古墳とならび導入期の横穴式石室である。その後、この地域で比較的容易に手に入れることが出来る板状構造の安山岩を使用する横穴式石室が取り入れられ、爆発的に増加する。片平1・5号墳(28)・長和田20号墳(32)・中興寺1号墳(51)・久見17号墳(49)・北福23号墳(57)・宮内31号墳・橋津9号墳・福庭古墳(17)・岡古墳群(67)・宇谷古墳群(66)などで知られている。このうち中興寺1号墳などのように各壁が一枚石で構成されている石室や、福庭古墳に見られるような切石石室は終末の様相を示す。古墳以外では、埴見中ノ谷古窯跡(30)がある。6世紀前葉の窯跡で、この地域の須恵器を生産した数少ない遺跡の一つである。また、各所で土師器・須恵器が表採されており、各古墳群を造った集団の集落の存在が確かめられる日も近いであろう。

- 歴史時代** この地域は古代寺院跡がたくさん見つかっている。白鳳期には、**大御堂廃寺**、**野方・弥陀ヶ平廃寺**（53）、**大原廃寺**が造営される。大御堂廃寺は法起寺式の伽藍配置であったと考えられている。礎石の中央には柱を据えた穴が穿たれており、炭化した柱の一部が残っていたという。この寺院は、発掘された墨書き土器より8世紀後半頃には久米寺と呼ばれていたようである。野方・弥陀ヶ平廃寺からは川原寺式の瓦の他に、塔心磯に柱穴をもつ塔心磯・礎石が見つかっている。大原廃寺からは、柱穴をもつ塔心磯、川原寺式の瓦が見つかっている。また、発掘調査により塔の基壇の一部が明らかになり、法起寺式の伽藍配置であったことが確認された。久見（48）でも7世紀後半頃と8世紀後半頃の瓦が見つかっており、寺院跡か官衙跡の存在が考えられる。奈良時代には現在の倉吉市国府に伯耆国衙が造られ、また伯耆国分寺、国分尼寺も建立されるなど、東伯耆は奈良・平安時代の政治の中心地であった。この地域は律令体制下にあっては伯耆国河村郡にあたり、河村郡は笏賀・舍人、多駄、埴見、日下、河内、竹田、三朝の八郷から成る。郡衙の所在地は不明であるが、河村郡、舍人郷、多駄郷の三か所が候補地として考えられている。<sup>(45682)</sup> この地域には古代律令体制の名残りとしての条里造構が残っている。天保地統全図などには整然と並んだ方格地割があり、当時の名残りを留めていると考えられている。
- 平安時代** 平安時代に入り自墾地系荘園が現われ律令体制が崩壊し、次第に封建制社会が形成されるようになる。このようななか、力を得てきたのが国司・郡司・寺社であった。東郷池周辺では、伯耆一宮、東郷氏である。東郷氏は、中央の貴族や寺社に所領を寄進して、地方豪族としての地位を高めていった。伯耆一宮である倭文神社（64）は「伯耆六社」の一つで、承和4（837）年に從五位下の神階が与えられていたが、広大な社領を経済基盤として在地領主層の信仰を集めながら伯耆一宮の地位を獲得したものと考えられている。平安時代末期になると、末法思想が広まる。伯耆一宮の境内に隣接した山林で経塚が発見された。経塚のなかには石室があり、そのなかに金銅製経筒、金銅製觀音菩薩立像、銅製千手觀音立像、銅板線刻弥勒立像などが安置されていた。経筒には「(中略) 廉和五年癸未 (中略)」銘が刻まれている。これら出土品は国宝に指定されている。
- 中世** 地頭の勢力は兼食幕府権力の伸長を背景に次第に強大になった。大阪府柳沢真次郎氏所蔵  
**鎌倉時代** の正嘉2（1258）年銘の「伯耆国河村郡東郷莊下地中分絵図」によって地頭の荘園侵略の様子が窺われる。長瀬高浜遺跡では約80基の火葬墓や土壙墓が調査され、この時期の墓制が明らかとなった。
- 室町時代** 中世城郭も数多く知られており、南条貞宗によって築城された羽衣石城（38）、山名氏によつて築城された河口城（68）などがある。応仁の乱後は各地で騒擾戦乱が絶えず、この地においても大永4（1524）年尼子経久によって羽衣石城が落城し、また馬ノ山で尼子氏と山名氏が合戦をするなど争いの跡をとどめている。天正9（1581）年には羽柴秀吉と吉川元春が対陣した。秀吉は御冠山に、元春は馬ノ山に陣を設けたが、馬ノ山にはこの時に築かれた土塁状造構が残っている。また、母母ヶ谷第2遺跡で調査された土塁状造構も、この対陣の際に築かれたと思われる。山間地にはこの時期と思われるタカラ跡が數カ所確認されている。<sup>(59)</sup> また、橋津川改修にともない、中世の貝塚が検出された。南谷貝塚（11）は、ヤマトシジミなどの貝類のほか、漆器などの木製品が出土している。
- 近世近代** 文久3（1863）年には外国に対する海岸防備のために砲台が設置された。鳥取県には由良、橋津、赤崎、淀江、境などに台場が建設され、海岸防備に当たった。橋津の台場（13）建設に当たって馬ノ山4号墳の前方部が削られたといわれている。

# 第3章 園西川遺跡・園7号墳の調査

## 第1節 園西川遺跡・園7号墳の概要

**位 置** 園西川遺跡・園7号墳は、園地内の裏手の丘陵から東に舌状に延びる、標高44~49mの丘陵上に位置する。この丘陵は、国道9号線によって分断されている。

**園西川 遺跡** 園西川遺跡で検出された遺構は、不明土坑2基（SK01・02）、土壙3基（SK03・05・06）、貯蔵穴と考えられる土坑1基（SK04）、ピット群がある。

このうち、SK05・06・ピット群は園7号墳の墳丘下から検出され、弥生時代後期後半のものと考えられるものである。これら以外は、調査区の北東側の緩やかな斜面で検出された。

**園7号墳** この丘陵上に単独で立地する。墳丘は、復元径20mを測り、泊村内では石鷲2号墳（尾尻古墳）に次ぐ大きさのものである。墳丘自体の遺存状況はよいが、墳頂部は昭和初期に敷設された電柱によって擾乱を受けており、主体部は大半が破壊されていた。

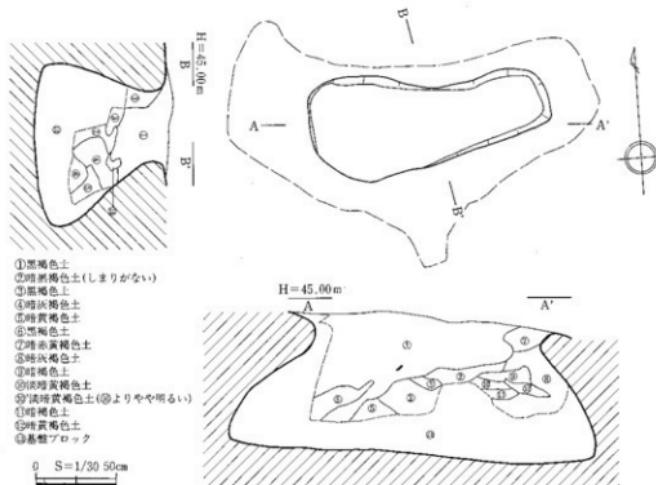
断ち割りの結果、園7号墳は墳丘基盤を削り出し、その上に盛土が行われていることがわかった。時期は6世紀前半と考えられる。

## 第2節 園西川遺跡の調査結果

### 1. 土坑・土壙

#### SK01 (挿図5、図版1)

**位 置** 調査区の北東側のF1・2グリッドにあり、標高44.8m~45.0mの緩やかに東に傾斜する斜面に位置する。南東側約1.5mにはSK02がある。



挿図5 園西川遺跡SK01遺構図

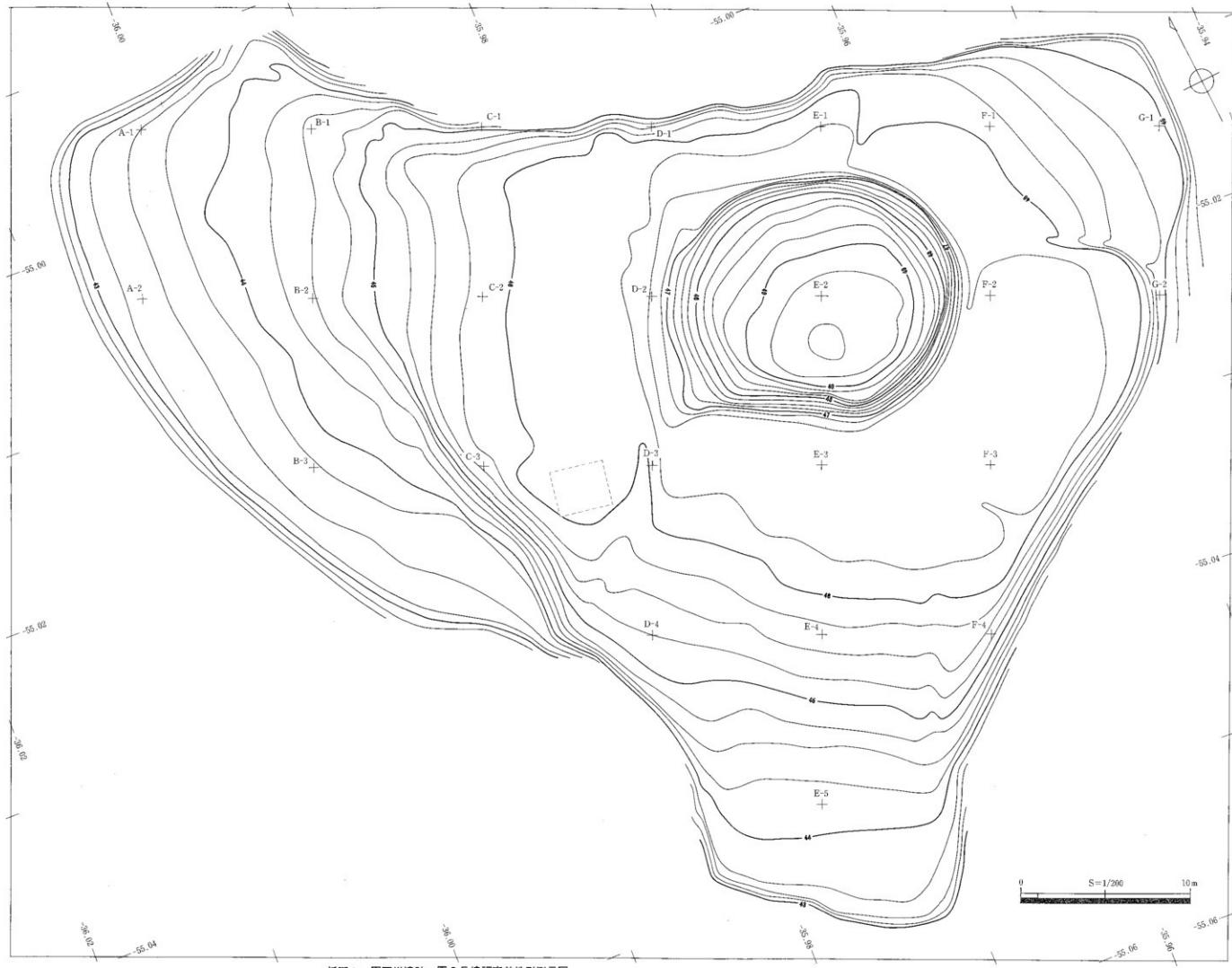


図6 國西川遺跡・圖7号墳調査前地形測量図

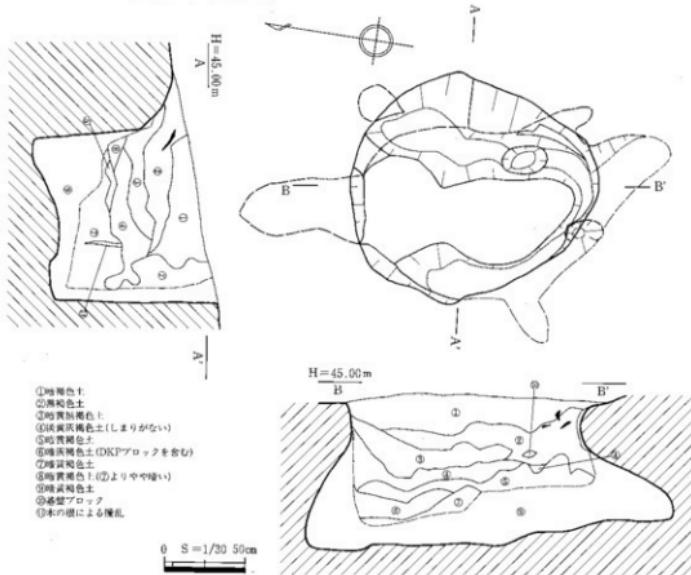


挿図 7 園西川遺跡遺構全体図

- 形 態** 平面は不整形な長方形を呈し、上縁部長径1.49m、短径0.49mを測る。底面は不整形に掘り込まれ、長径2.26m、短径0.86mを測る。底面は緩やかに東側に傾斜している。深さは、最大0.88mで、断面袋状を呈す。
- 埋 土** 埋土は12層に分層できる。上方は、自然堆積したと考えられる黒褐色土が厚く堆積し、下方は、基盤が崩れながら堆積した状況が窺われる。
- 黒褐色土中から安山岩の板石が多数出土している。
- 時 期** 遺物が出土していないため、SK01の時期は不明である。
- 性 格** SK01の性格は不明である。

#### SK02 (挿図8、図版1)

- 位 置** 圖7号墳の北東側のF2グリッドにあり、標高44.9mの緩やかに東に傾斜する斜面に位置する。北西側約1.5mにはSK01が、南東側約2mにはSK03がある。
- 形 態** 平面は不整形な円形を呈し、上縁部長径1.53m、短径1.39mを測る。底面は二段に不整形に掘り込まれ、西側に緩やかに傾斜している。長径約1.6m、短径約0.97mを測る。深さは、最大1.1mで、断面は一部袋状を呈す部分もある。壁には、横方向に動物が掘ったと考えられる穴が掘り込まれている。
- 埋 土** 埋土は10層に分層できる。上方は、自然堆積したと考えられる黒褐色土が厚く堆積し、下方は、基盤が崩れながら堆積した状況が窺われる。
- 黒褐色土中から安山岩の板石が多数出土している。
- 時 期** 遺物が出土していないため、SK02の時期は不明である。
- 性 格** SK02の性格は不明である。



挿図8 西川遺跡SK02遺構図

S K03 (挿図9・10、図版2・8)

**位 置** 調査区の北東側のF 2 グリッドにあり、標高44.7m~44.9mの緩やかな東斜面に位置する。北西側約2mにはS K02がある。

**形 態** 平面は不整形な長方形を呈し、上縁部長軸1.07m、短軸0.42mを測る。深さはあまりなく、最大0.11mである。底面は平坦になっているが、木の根による擾乱が著しい。

**埋 土** 埋土は暗褐色土が単層ではいる。

**遺 物** 底面北側壁際に、須恵器杯蓋Po 1が伏せた状態で出土している。

**時 期** Po 1は、小型で天井部・口縁部の境はなく、端部が丸く仕上げられるもので、山本編年IV期・陶邑編年T K217に並行するものと考えられ、S K03は古墳時代後期後半のものと考えられる。

**性 格** S K03は、土壤と考えられる。

S K04 (挿図11、図版2)

**位 置** 調査区の北東側のF 2 グリッドにあり、位置的には図7号墳の東側周溝底部付近に位置する。検出面の標高は46.3m~46.4mである。北東側約5mにはS K02がある。

**形 態** 平面は不整形な円形を呈し、上縁部長径0.94m、短径0.88mを測る。深さは最大0.62mで、断面袋状を呈す。底面は不整橢円形を呈し、長径1.05m、短径0.79mを測る。底面中央部には、(19×19~20)cmを測るビットが掘り込まれている。

このビットは、上屋を支えるためのものと思われる。

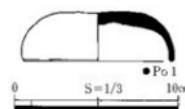
**埋 土** 埋土は、炭化物を含む淡褐色土のみで、ビット内には、淡灰褐色土が入る。

**時 期** 遺物は出土していないため時期は不明である。

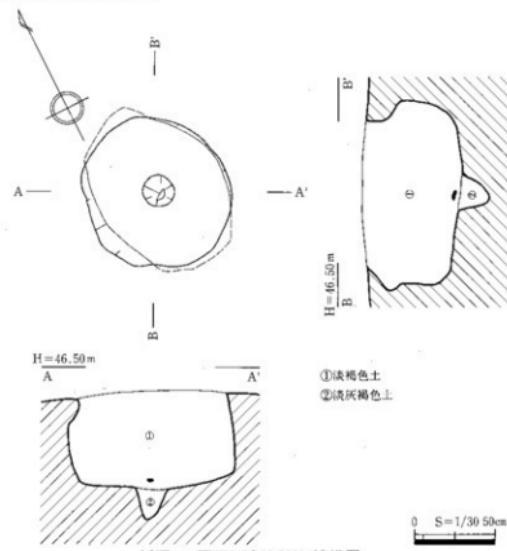
**性 格** S K04は、形態上の特徴から貯蔵穴と考えられる。



挿図9 園西川遺跡SK03遺構図



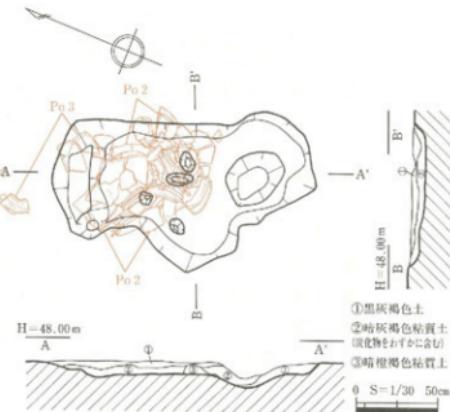
挿図10 園西川遺跡SK03  
出土遺物実測図



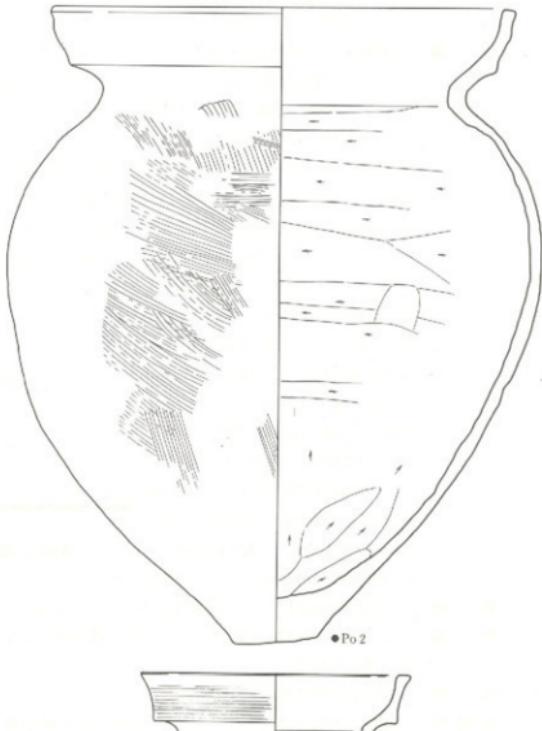
挿図11 園西川遺跡SK04遺構図

SK05 (挿図12・13、図版2・8)

- 位 置** 調査区のほぼ中央部のD 3 グリッドにあり、標高は47.8m ~ 47.9m のほぼ平坦面に位置する。位置的には闇7号墳の旧表土下にある。北東側約4mにはSK06がある。
- 形 態** 平面は不整形な長方形を呈し、上縁部長軸1.58m、短軸0.64mを測る。深さはあまりなく、最大0.09mである。底面は不整形な平坦面を呈し、南東側には(38×29-11)cmを測るピットが掘り込まれている。
- 埋 土** 埋土は、2層に分層できる。②層には炭化物をわずかに含む。
- 遺 物** 埋土上面で、複合口縁をもつ甕Po 2が、出土状況  
漬れた状態で出土している。やや離れて複合口縁をもつ甕Po 3が出土して  
いるが、これは、闇7号墳の旧表土  
中のものと接合している。
- Po 2は、口縁部  
が厚手で端部が平  
坦面をもち、外面  
ナデである。胴部  
は倒卵形を呈し厚  
手の平底をもつ。
- Po 3は、端部が  
平坦面をもち、外  
面は平行沈線後ナ  
デ消すものである。
- 時 期** SK05の時期は、  
Po 2・Po 3より  
弥生時代後期後半  
と考えられる。
- 性 格** SK05は、土壤  
と考えられ、甕が  
共歴されたものと  
考えられる。



挿図12 國西川遺跡SK05遺構図



S K06 (挿図14・15、図版3)

**位 置** 調査区の北東側のE 2 グリッドにあり、標高は47.5m付近のはば平坦面に位置する。位置的には図7号墳の旧表土下にある。南西側約4mにはS K05がある。

**形 態** 平面は不整形な円形を呈し、上縁部長径1.06m、短径0.8mを測る。深さはあまりなく、最大0.21mである。底面は皿状を呈す。木の根による搅乱が著しい。

**埋 土** 埋土は、3層に分層できる。③層には炭化物を含む。

**遺 物** 底面で、複合口縁をもつ甕Po 4が出土している。

**出土状況** Po 4は、口縁部が短く外傾し、外面平行沈線後ナテ消すものである。

**時 期** S K06の時期は、Po 4より弥生時代後半に作られたものと考えられる。

**性 格** S K06は、土壙と考えられる。

2. ピット群・遺構外遺物について  
(挿図16・17、図版3)

**位 置** 調査区のはば中央部のD 2・D 3・E 2・E 3グリッドにあり、標高は47.5m～47.7mのはば平坦面に位置する。位置的には図7号墳の旧表土下にある。

計27個のピットが掘り込まれている。それぞれの規模は、P1(34×30-11)cm、P2(58×40-11)cm、P3(53×46-15)cm、P4(32×22-10)cm、P5(39×28-8)cm、P6(40×26-8)cm、P7(73×58-16)cm、P8(75×60-13)cm、P9(94×68-16)cm、P10(54×43-8)cm、P11(58×52-14)cm、P12(70×57-17)cm、P13(52×40-11)cm、P14(90×70-16)cm、P15(71×51-12)cm、P16(42×34-15)cm、P17(32×23-6)cm、P18(35×27-15)cm、P19(78×60-26)cm、P20(88×60-14)cm、P21(52×45-14)cm、P22(41×38-16)cm、P23(77×47-12)cm、P24(110×88-15)cm、P25(67×52-26)cm、P26(102×54-25)cm、P27(72×72-12)cmを測る。

いずれも深さがあまりなく、不規則に並んでいる。

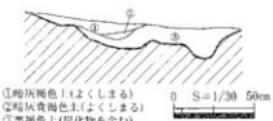
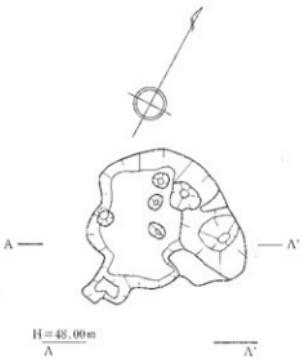
**遺 物** 周辺から底部Po 5、不明鉄器片F 1・F 2が出土している。

**時 期** ピット群の時期は、Po 5より弥生時代後半に作られたものと考えられる。

**性 格** 性格は不明である。

**遺 構 外** 調査区西側のA 2 グリッドから、回転糸切り痕が残る杯底部

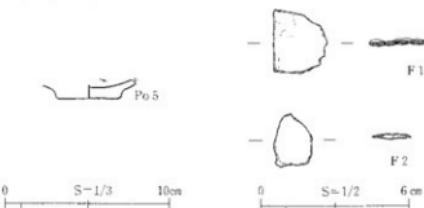
**遺 物** Po 6が出土している。奈良時代以降のものと考えられる。



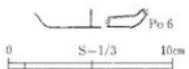
挿図14 園西川遺跡SK06遺構図



挿図15 園西川遺跡SK06  
出土遺物実測図



挿図16 園西川遺跡ピット群出土遺物実測図



挿図17 園西川遺跡遺構外  
出土遺物実測図

### 第3節 園7号墳の調査（掉図18～27、図版3～5・8）

- 位 置** 墓地内の裏手の丘陵から東に舌状に伸びる、標高44～49mの丘陵上に位置する。現在この丘陵は、国道9号線によって分断されている。園古墳群は总数17基からなる古墳群であるが、同丘陵上には現在のところ他に古墳は存在せず、園7号墳が単独で存在する。
- 現 況** 調査前の観察では、墳丘は径約18m、高さ約3mを測る円墳と考えられ、泊村内では全長33mの前方後円墳である石脇2号墳（尾尻古墳）に次ぐ規模の古墳であると判明した。墳頂部には昭和初期に敷設されたと考えられる電柱が立てられており、その際に主体部が破壊されたものと考えられ、赤色塗彩された石材の破片が散乱していた。また、墳裾は後世の耕作等により削り取られ、特に南側では旧表土面が露出するほど改変されていた。
- 墳 丘** 表土及び耕作土を除去したところ、見かけの墳丘は、径が東西17.6m、南北15.4m、高さが東側で3.2m、北側で2.9mを測る円墳と考えられる。墳裾周囲は、耕作等によって削り取られているが、特に南側の変形が著しい。しかし、東側にだけ周溝が遺存しており、このことから推定すると、本来の墳丘規模は径約20mを測るものと考えられる。
- 周 溝** 周溝は、周辺が耕作等により削平されており遺存状態が非常に悪く、東側にのみ長さ13mにわたって検出することができた。幅は2.2～3.3m、深さは0.24mを測り、断面U字状を呈す。周溝はわずかに弧状を呈しており、本来の墳形は円墳であったことがわかる。
- 盛 土** 墳丘は、基盤層の削り出しと盛土によって形成されている。基盤層は、北側に向かって緩やかに傾斜しているがほぼ平坦で、墳丘基盤は、周溝底からの比高差が2.2mを測る高さまで削り出されている。盛土に先立っての基盤層の整形はされておらず、旧表土（22層）が一面に残っている。Ⅲ表上中には多量の炭化物を含んでいる。
- 盛土は、最も厚いところで1.2mを測る。盛土の状況を見ると、どの層も厚さは均等ではなく、乱雑に盛られている感があるが、下層の暗赤灰褐色粘質土（⑯層）が中央でやや高く盛られている。暗黄褐色土（⑮層）以下は厚く盛られ、⑮層上面では水平になるように盛られていることが観察できる。この層以上は、薄く、細かく盛土され、⑬層が一面に盛られている。
- また、墳丘北東側及び北西側ではほぼ4mの等間隔に板石が一枚ずつ立てられていることがわかった。なお、北西側の2枚の板石は転倒していたが、本来は立てられたものと考える。これらの石材は盛土中にあることから、葺石等の外装施設とは考えられず、盛土の際の何らかの目印として立てられたものと考える。
- 主 体 部** 墳丘表面観察の段階で、墳丘中央部で板石が散乱しており、主体部はかなり破壊されていると考えられたが、表土・擾乱土を除去すると、箱式石棺の長側板と考えられる石材及び墓壙掘り方のラインを一部検出することができた。墓壙内を掘り下げると、擾乱された暗褐色土と共に、石棺材と考えられる赤色塗彩された（ベンガラと考えられる）安山岩の板石が多数検出された。また、西側は電柱敷設の際のアンカーが掘り込まれ、大きく破壊されていた。
- 墓壙の規模は、長さ2.17m、幅1.23m、残存深さ0.82mを測る。主軸方向は、N-75°Wとほぼ東西に振る。墓壙底面には石棺材を立てるための、幅13～23cm、深さ7～15cmを測る溝を検出することができた。
- 墓壙は、盛土が行われた後に掘り込まれたものと考えられ、底面は17層まで掘り込まれている。
- 箱式石棺は、長側板の一部と西側小口板の一部が遺存しているに過ぎず、正確な規模は不

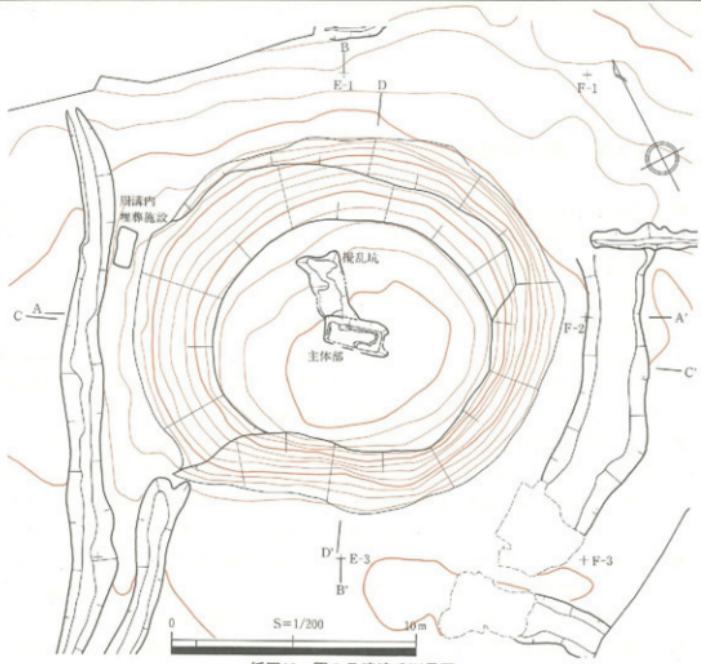
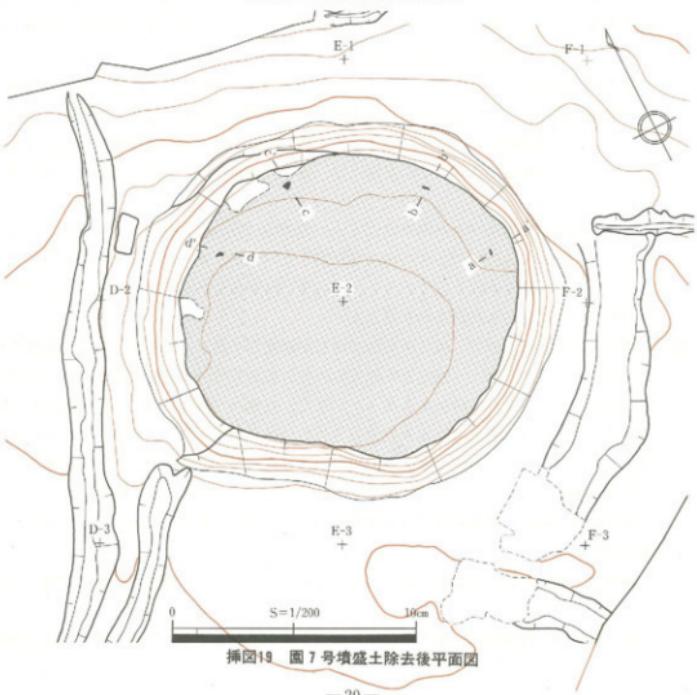
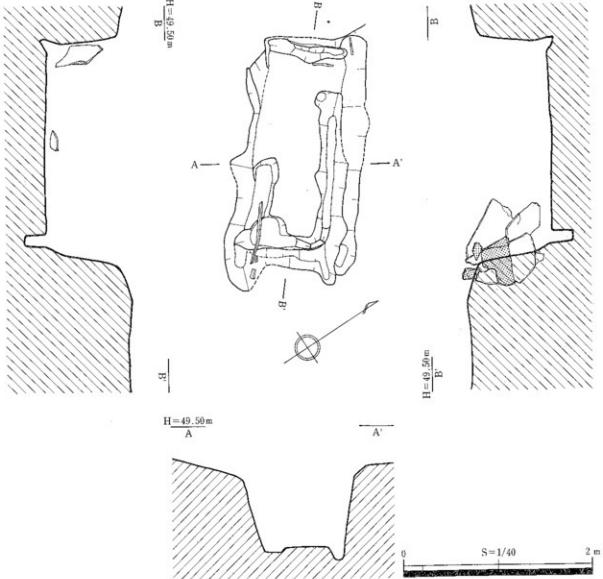
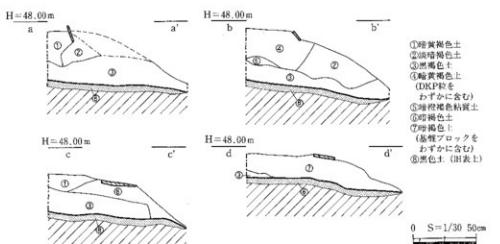


插圖18 圖7號墳塚丘測量圖

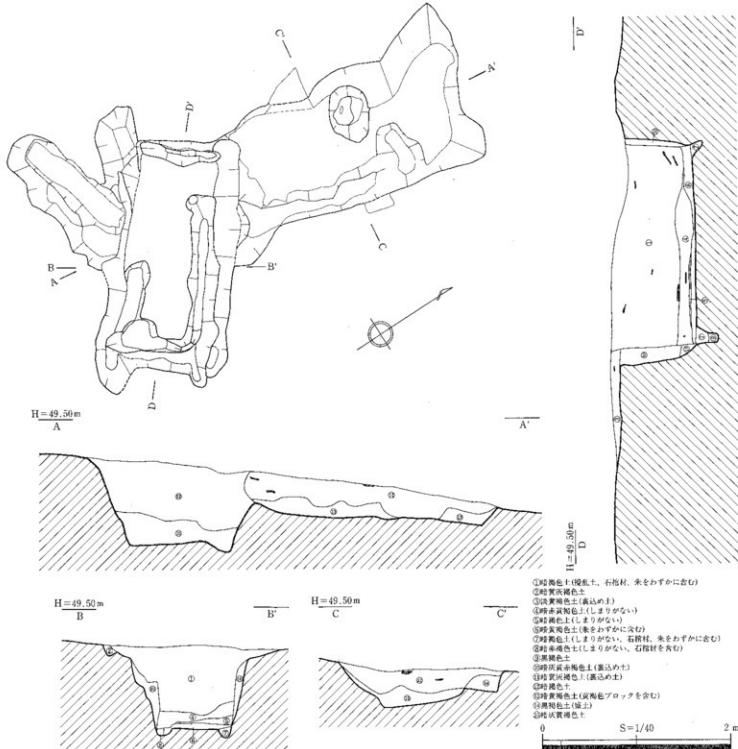




插図20 圖7号墳主体部造構図



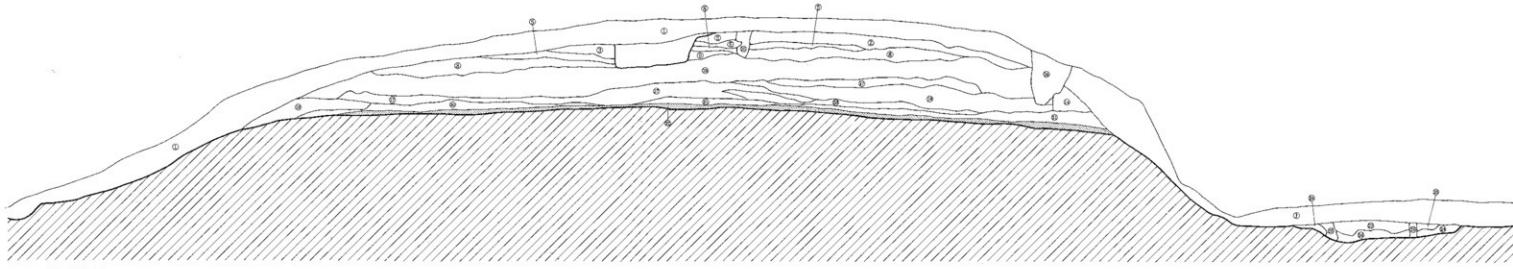
插図21 盛土内板石出土状況土層断面図



插図22 圖7号墳主体部・擾乱坑造構図

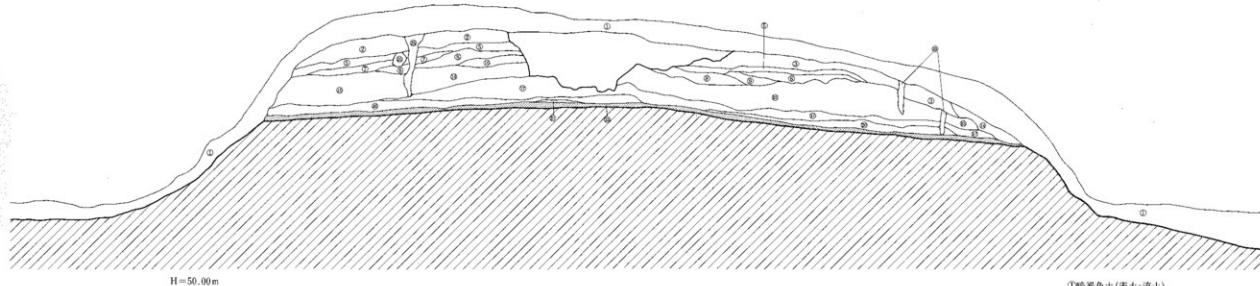
H = 50,00 m

A



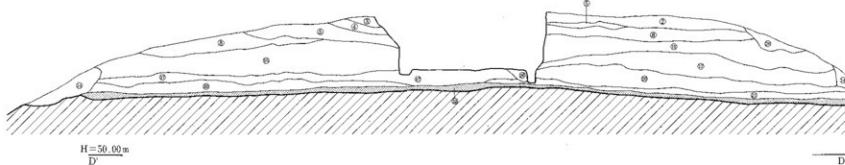
H = 50,00 m  
B'

B



H = 50,00 m  
C

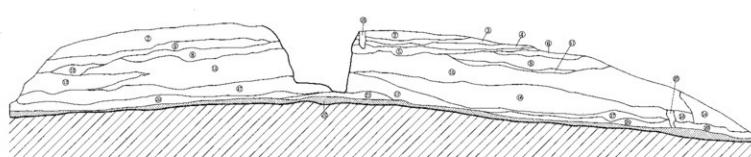
C



H = 50,00 m  
D

D

- ①峰褐色土(表土・底土)
- ②峰赤褐色土(DKPブロックを含む)
- ③暗褐色土
- ④黄褐色土
- ⑤黑褐色土(DKPブロックを含む)
- ⑥暗赤褐色土
- ⑦淡黒褐色土(DKPブロックを多く含む)
- ⑧黄褐色土
- ⑨淡黒褐色土(DKPブロックを多く含む)
- ⑩灰黃褐色土
- ⑪淡灰褐色土
- ⑫暗灰褐色土
- ⑬暗褐色土
- ⑭灰褐色土
- ⑮暗褐色土(しまりがない)
- ⑯暗黃褐色土
- ⑰暗褐色土
- ⑱暗赤褐色土
- ⑲暗褐色土
- ⑳淡黒褐色土(⑯に類似。しまりがない)
- ㉑黑褐色土(暗褐色コームブロックを含む)
- ㉒峰褐色土質土
- ㉓黑色土(田表土)
- ㉔暗褐色土
- ㉕暗黃褐色土
- ㉖木の根による擾乱
- ㉗塊状土



掲図23 圖7号墳土層断面図

明であるが、墓壙底に残っていた溝から推定すると、長さ約1.8m、幅約0.5m、高さ0.8m程度の規模になると考えられる。また、石材の遺存状態から、この石棺は小口板を長側板ではさんだものと考えられる。頭位方向は不明である。石棺埋設後は、暗灰黄赤褐色土・暗黄灰褐色土で裏込めされている。

主体部北西側には長さ2.5m、幅1.4m、深さ19~34cmを測る不整形な掘り込みが検出された。この掘り込みの埋土（暗褐色土）中からは、石棺に使用されたと考えられる安山岩の板石の破片が出土しており、盜掘の際に掘り込まれた盜掘坑と考えられる。

**周溝内 墓壙西側で、石棺が検出された。墓壙は、長さ1.5m、幅0.75m、深さ20~35cmを測り、墓壙底面は西側に向かってゆるく傾斜している。また、北側には小口板を立てるための溝が掘り込まれている。**

石棺は、北側小口板・東側長側板の一部のみ遺存しており、正確な規模は不明である。また、底には石材は使用されなかったと考えられ、傾斜する側の墓壙底を⑥層で平らにしている。

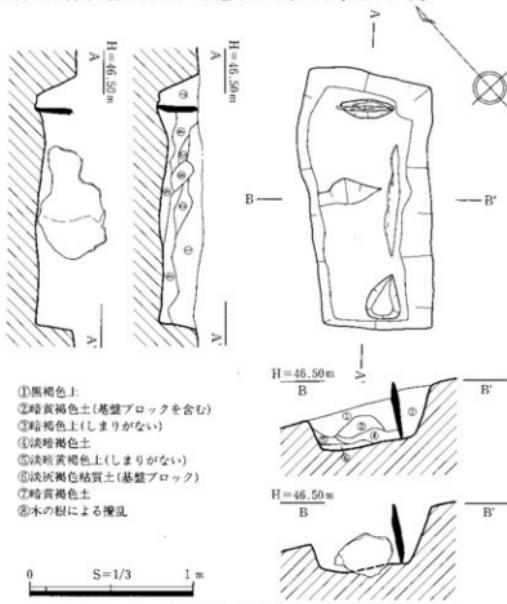
埴丘西側では周溝が検出されなかったが、この石棺は造られている位置から、周溝内埋葬施設と考えられる。

**遺物** 図化できた遺物は須恵器杯蓋Po 7~Po10、須恵器杯身Po11・Po12、直口壺Po13・Po14、  
**出土状況** 土師器壺Po15、土師器甕Po16・Po17、弥生土器底部Po18、杯Po19、蓋Po20である。これらはすべて表土・擾乱土及び盛土中からの出土である。

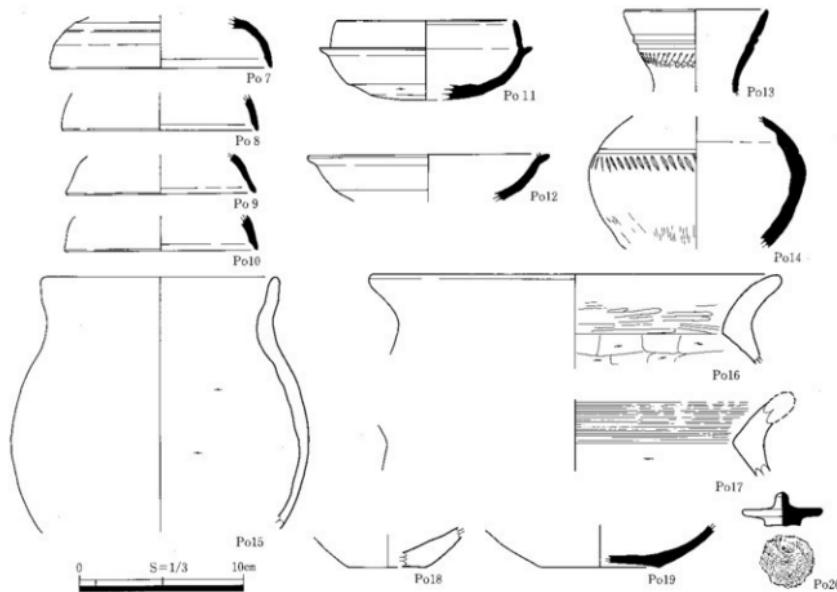
**時期** このうち、表土から出土したPo 7・Po 8・Po10は、口縁端部がわずかに二段になり、ケズリの範囲も比較的広いが天井部の稜は極めて不明瞭である。また、Po11は、口縁端部が二段になり、立ち上がり最も高く、底部も丸味をもつことから、山本編年二期・陶邑編年MT15並行期と考えられ、図7号墳は古墳時代後期初頭に築造されたものと考えられる。

また、盛土中から出

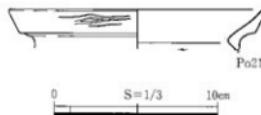
土したPo18は弥生時代後期後半のものと考えられ、図7号墳はこの時期の遺構を壊して築造されている。



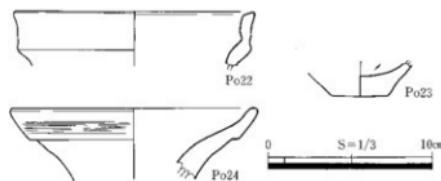
插図24 圖7号墳周溝内埋葬施設遺構図



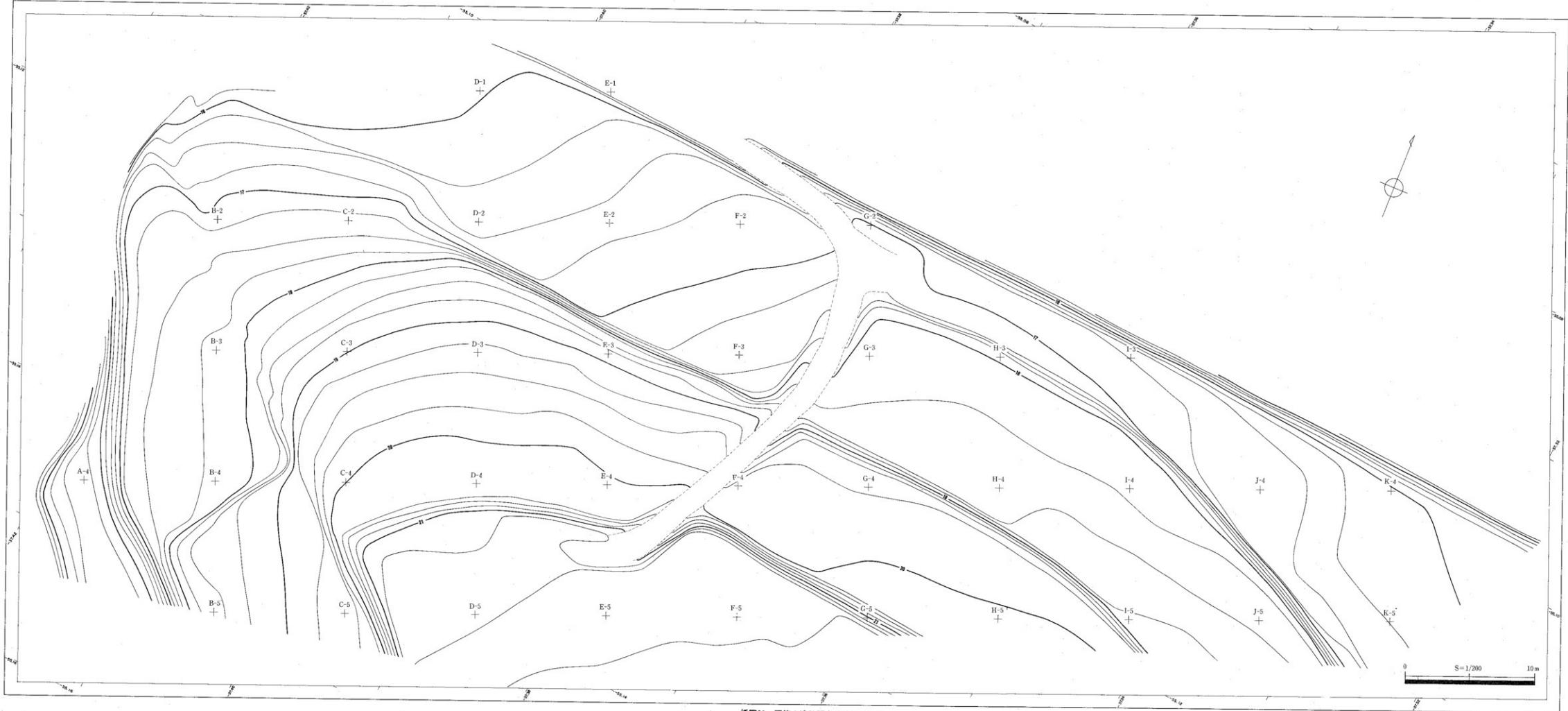
插図25 圖7号填表土中出土遺物実測図



插図26 圖7号填盛土中  
出土遺物実測図



插図27 圖7号填旧表土中出土遺物実測図



附图28 原第2道路调查前地形测量图

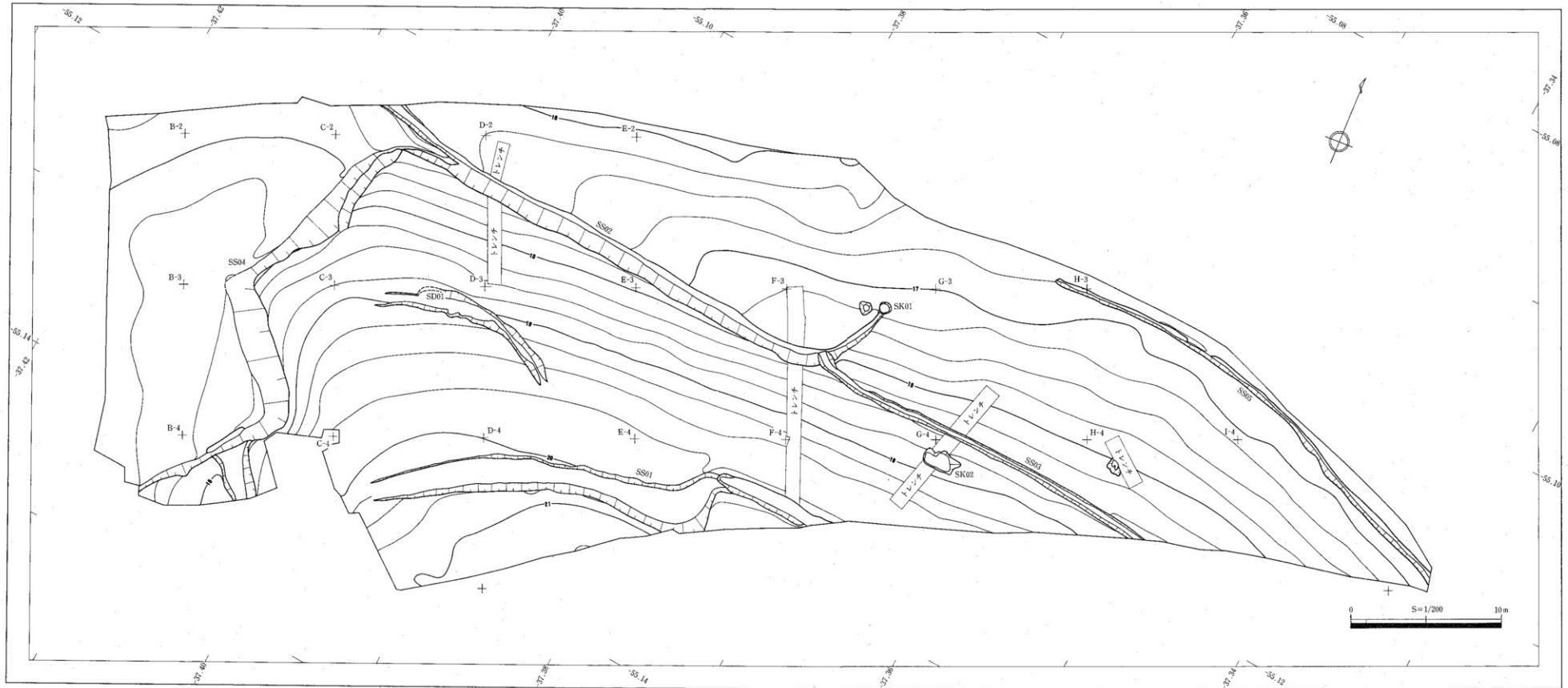


插图29 原第2遗迹构造全体图

## 第4章 原第2遺跡の調査

### 第1節 原第2遺跡の概要

位 置 原第2遺跡は、泊村原の西端、同村宇谷との境界付近に位置する。砂丘地近くの標高約20mの丘陵上にあり、宇谷集落を望むことができる。

造 構 今回の調査区は農地であり、後世の擾乱が激しいと推察される。一方、基盤層上の耕作土及び黒褐色土中で、土器が検出されたことから、すでに破壊されていた遺構も少なくないとと思われる。

検出した遺構は、土坑2基、溝状遺構1条、段状遺構5基である。これらのうち、SK01は縄文土器を伴っており、縄文早期末～前期の落とし穴と考えられる。これに対して、他のものにはほとんど遺物が含まれなかった。遺構の形状・地形との関係から推定すると、比較的新しい時代のものと思われる。

特に、段状遺構については、基盤層を削り取っていること、段のきわに浅い溝が走ること、調査前の畑の区分に沿っているという共通点が見られ、段状遺構4基は畑地を作るときに削られた、開墾段と判断できる。時期は不明である。

### 第2節 原第2遺跡の調査結果

#### 1. 土 坑

##### SK01（挿図30・31、図版6・8）

位 置 SK01は調査区東部、F4グリッドに位置する。標高は約17mである。南には、SS02が位置する。

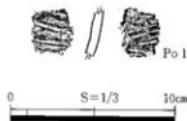
形 態 平面は円形、断面は長方形を呈し、長径0.78m、短径0.7m、深さ0.55mを測る。擾乱のため上部が削り取られていると考えられる。

埋 土 埋土は黒褐色土で、よくしまっていた。

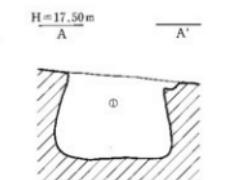
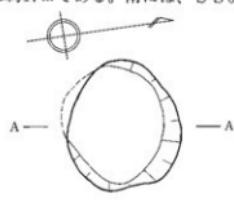
遺 物 埋土中より、縄文土器Po1が出土した。Po1には二枚貝条痕が残る。

時 期 縄文土器Po1より、当遺構は縄文時代早期末～前期のものと思われる。

性 格 用途は、落し穴と考えられる。



挿図31 原第2遺跡SK01  
出土遺物実測図

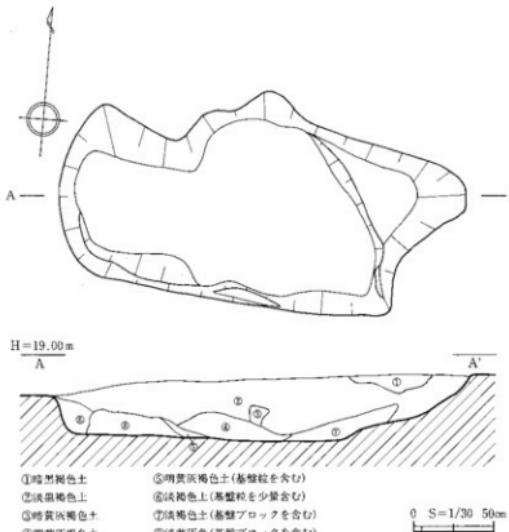


①堆積褐色土(よくしまっている)  
0 S=1/3 50cm

挿図30 原第2遺跡SK01遺構図

### S K 02 (挿図32、図版7)

- 位 置 S K 02は調査区東南部、G 5 グリッドに位置する。標高は約19mである。約1m南には、S S 03が走っている。
- 形 態 平面は不整形を、断面は逆台形を呈する。長軸約2.6m、短軸約1.3m、深さは約0.48mである。
- 時 期 当造構は遺物を伴わず、時期・用途ともに不明である。

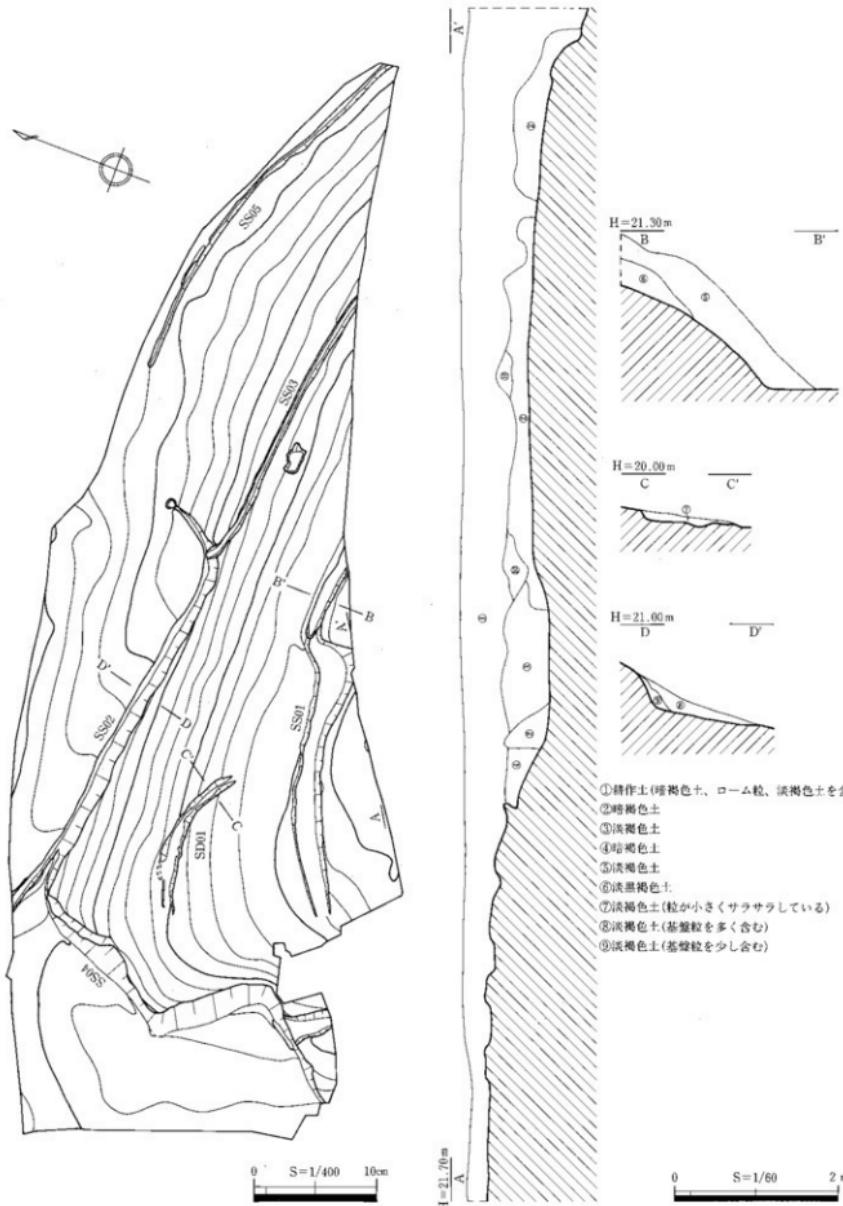


挿図32 原第2遺跡SK02造構図

## 2. 溝状造構

### S D 01 (挿図33)

- 位 置 S D 01はC 4・D 4 グリッドをほぼ東西方向に走っている。標高約18.7m～19.5mの、北を向いた緩斜面に位置する。北6.5mにはS S 02が、南4.5mにはS S 01が、西5mにはS S 04がそれぞれ位置する。
- 形 態 平面は円弧状を、断面は逆台形を呈する。北西壁の一部が、擾乱されている。
- 規 模 長さ約3.2m、幅約80cm、深さ0.12mとなっている。
- 埋土時期 埋土はサラサラした淡褐色土である。遺物は検出されなかった。時期・用途ともに不明である。



插図33 原第2遺跡溝状造構・段状造構造構図・土層断面図

### 3. 段状遺構

#### S S 01 (挿図33、図版7)

- 位置 S S 01は調査区南端、C 5・D 5・E 5グリッドに位置する。遺構周辺は、標高約19.7m～21mの、北西を向いた緩斜面になっている。北西約4.5mにはS D 01がある。
- 形態 平面はほぼ直線状であるが、E 5グリッドで北東へ屈曲し、調査区外に伸び出している。断面は三角形を呈する。
- 規模 規模は、長さ約32m、幅約1.2m～3.5mを測る。高低差は約0.4mで、北へ向かって急激に下がる。
- 埋土 淡褐色土を埋土とする。埋土中より土器片を出土したが、図化することはできなかった。
- 遺物時期 時期も不明である。

#### S S 02 (挿図33、図版7)

- 位置 S S 02は調査区北西、C 3・D 3・E 3・E 4・F 4グリッドを、ほぼ東西方向に走っている。遺構付近は標高約16m～18.2mの北を向いた斜面となっている。東ではS S 03と、西ではS S 04と、それぞれ接している。一方、南側約6.5mには、S D 01がある。
- 形態 平面は直線状であるが、F 4グリッドで北東へ折れている。
- 規模 規模は、長さ38m、幅1.5mを測る。高低差約1.65mで、急な下がり方をしている。
- 埋土 S S 03・S S 04との切り合いは、わからなかった。
- 遺物時期 遺物を伴わず、時期も不明である。

#### S S 03 (挿図33)

- 位置 S S 03は調査区東側、F 4・G 5・H 5グリッドを、東西に走っている。遺構周辺は標高約18m～19.7mの北を向いた緩斜面である。西はS S 02と接し、南にはS K 02・S S 01が位置する。
- 形態 平面はほぼ直線状である。底面は平らになっている。
- 規模 規模は、長さ約25m、幅0.7mである。高低差は0.23mと、やや緩やかに下がっている。
- 埋土 基盤粒を含む暗褐色土・淡褐色土を埋土とする。
- 遺物時期 遺物を伴わず、時期も不明である。

#### S S 04 (挿図33)

- 位置 S S 04はC 3グリッドでS S 02より枝分かれし、南北方向に走る遺構である。東側にはS D 01・S S 01が位置する。付近は北西を向いた標高約18.5～19mの斜面である。
- 形態 平面は「S」字状を呈し、B 3・B 4グリッドで屈曲する。
- 規模 規模は長さ約35m、幅0.7m～2.2mを測る。高低差約1.0mで、比較的急な段になっている。
- 遺物時期 遺物を伴わず、時期も不明である。

#### S S 05 (挿図33)

- 位置 S S 05は、調査区北端 I 4・I 5・J 5グリッドを、東西方向に走る。遺構周辺は標高16.8mである。約12m南にはS S 03が位置する。

形態 平面はほぼ直線状である。  
 規模 規模は、長さ44m、幅1.5mを測る。高低差は0.48mで、緩やかな段になっている。  
 遺物時期 遺物を伴わず、時期も不明である。

#### 4. 遺構外遺物について（挿図34、図版8）

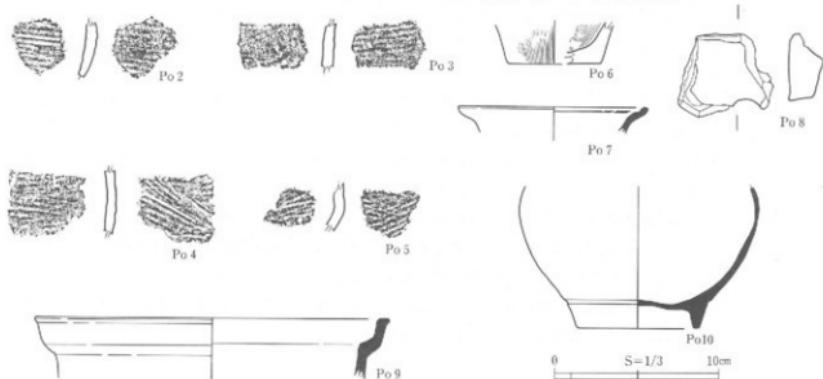
遺構外からは、わずかに縄文土器片、弥生土器片、須恵器杯、瓦質羽釜、陶器片が出土している。

Po 1～Po 5は、内外面に二枚貝条痕が明瞭に残る粗製の縄文土器片である。いずれも小片のため器形を特定することはできない。縄文時代早期末～前期と考えられる。

Po 6は、しっかりとした平底を呈す底部で、内外面共にハケ調整が見られる。弥生時代中期と考えられる。

Po 7は、須恵器杯と考えられる。時期は奈良～平安時代と思われる。

Po 8は土師質の土器で円形の透かしをもつ。Po 9は瓦質羽釜である。Po 10は施釉陶器壺である。時期は、Po 8・Po 9が中世、Po 10は近・現代のものと考えられる。



挿図34 原第2遺跡遺構外出土遺物実測図

## 第5章 遺構・遺物の検討

今回園西川遺跡・園7号墳・原第2遺跡において調査した遺構は、円墳1基、土坑・土壤8基、溝状遺構1条、段状遺構4基である。ここでは、園7号墳について取り上げ、調査によって明らかになった事柄を整理し、まとめとする。

### 1. 園7号墳

遺物 まず、出土遺物について考えてみたい。

出土遺物は、墳丘表土中・盛土中から出土しており、築造時期を知るものとは言えないものであるが、墳丘表土中出土の須恵器杯蓋Po 7が天井部と口縁部との境界及び口縁端部に不明瞭ではあるが段をもち、また、杯身Po 11が立ち上がりが高く、端部には不明瞭な段をもち底部が丸みをもつものであることから、山本編年二期<sup>33</sup>・陶邑編年MT15<sup>34</sup>並行と考えられ、園古墳群の中では最も古いものであることが判明した。

出土した須恵器のうちPo13・Po14は直口壺と考えられる。須恵器直口壺はTK47段階で消滅すると考えられており、これらは、杯蓋・杯身よりは若干遅る時期が与えられる。

また、土師器壺Po15は、口縁部がごくわずかアクセントをもち、複合口縁が退化したものと考えられる。この時期の土師器の様相を知る資料である。

**立地** 園7号墳は、17基からなる園古墳群に含まれるものであるが、周辺には他に古墳は確認されておらず、単独で立地しているため、まったく支群が異なるものといえる。

**墳丘築造過程** 墳丘の遺存状態はよく、盛土は1.2mの厚さをもつ。盛土の状況を観察すると、墳丘は数段階の過程で造られていると考えられる。以下、墳丘築造過程について考えてみたい。

①段階は、基盤層を削り出して墳丘基盤を造る段階と考える。この時墳丘基盤上面は加工されず、元の基盤をそのまま利用したと考えられる。また、旧表土中には非常に多くの炭化物を含んでおり、盛土を行う前に草木を焼きはらったものと考えられる。墳丘基盤は、周溝底から2.2mの高さをもつ。

②段階は、この墳丘基盤上に下部の盛土が行われる段階と考える。⑤層以下は比較的厚く盛られ、この層上面ではほぼ水平になるように盛っている。

この段階で、⑤層中には、墳丘端付近で板石が約4m間隔で立てられる。これらは、外表施設とは考えられず、盛土を行う際の何らかの目印と考えられるが、類例がなく更に検討を要するものである。

③段階は、上部盛土が行われる段階と考える。⑤層以上の層は薄く細かく、墳丘中央部から外側に向かって盛られている。

④段階は、主体部墓壙を掘り、石棺が埋置される段階と考える。墓壙は、⑦層まで掘り込まれている。

以上墳丘築造について考えてみたが、①段階については、羽合町・南谷19号墳にも確認されている。南谷19号墳は前方後円墳であるが、時期は園7号墳と同様MT15段階に並行するものと考えられており、この時期の墳丘築造に共通点が見いだされる。

園7号墳の調査は、墳丘築造、横穴式石室出現前夜の古墳の様相を解明する上で、また、治村内における古墳研究において重要な資料となろう。

## むすびにかえて

多くの方々の努力により、漸くここに調査報告を上梓する運びとなった。せめて、調査結果のまとめは満足のいくものとしたかったが、時間と力量の不足はいかんともしがたく、詳細な事実記載に重点を置き、報告の責を果たすよう努めたつもりである。園西川遺跡・園7号墳・原第2遺跡の評価は、後日に委ねることになるが、本書に納めた内容が研究の一助となれば幸いである。

最後に、調査の実施・報告の作成に当たり、指導・協力あるいは助言をいただいた各位に深く感謝申し上げたい。

## 註・参考文献

- 註1 治村教育委員会『治村内遺跡発掘調査報告書』 1989  
 2 新日本海新聞社『鳥取県大百科事典』 1984  
 3 治村『治村誌』 1989  
 4 東郷町『東郷町史』 1987  
 5 鳥取県教育研修センター『天神川流域とその周辺』 1983  
 6 鳥取県埋蔵文化財センター『旧石器・縄文時代の鳥取県』 1988  
 7 倉吉市教育委員会『高鼻2号墳(瀬手2号墳)発掘調査報告書』 1982  
 8 倉吉市教育委員会『佐喜御内跡発掘調査概報(第3次)』 1975  
 9 鳥取県埋蔵文化財センター『鳥取県文ニース』 No28 1990  
 10 倉吉市教育委員会『立籠遺跡群 取木道跡・一反半田道跡発掘調査報告書』 1984  
 11 鳥取県教育文化財団『南谷ヒジリ道跡・南谷夫婦塚道跡・南谷19~23号墳・乳母ケ谷2号墳・宇野3~9号墳』 1991  
 12 北条町教育委員会『鳥島遺跡発掘調査報告書第1集』 1983  
 13 名越勉『原始・古代・「倉吉古史」』 1973  
 14 倉吉市教育委員会『津田峰遺跡発掘調査報告書』 1986  
 15 東伯町教育委員会『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』 1987  
 16 関田町教育委員会『横峯遺跡発掘調査報告書』 1986  
 17 山陰考古学研究所『山陰の前期古墳文化の研究1』 1978  
 18 山陰中央新報社『さんいん古代史の周辺一』 1978  
 19 鳥取県教育文化財団『久古第3遺跡・貝田原道跡・林ヶ原道跡発掘調査報告書』 1984  
 20 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』 II~VI 1981~1983  
 21 北条町教育委員会『北尾遺跡発掘調査報告書』第1集 1987  
 22 米子市教育委員会『日久美道跡』 1986  
 23 佐々木謙他『倉吉福庭遺跡』 1970  
 24 鳥取県教育委員会『東郷町大鼻遺跡』『埋蔵文化財発掘調査概報』 1973  
 25 鳥取県教育文化財団『宇谷第1遺跡・南谷大ナル遺跡発掘調査報告書』 1992  
 26 鳥取県埋蔵文化財センター『弥生時代の鳥取県』 1985  
 27 名越勉・甲斐忠彦『鳥取県東郷町出土の小銅鏡』『考古学雑誌』第59卷2号 1973  
 28 鳥取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書第1集』 1960  
 29 金光清六『伯耆八幡町銅鏡出土道跡』『考古学雑誌』第23巻4号 1933
- 註30 倉吉市教育委員会『上米積遺跡発掘調査報告』 1980  
 一阿弥大寺地区一 1980  
 31 東森市良『四隅突出型埴丘墓』 ニュー・サイエンス社 1989  
 32 北条町教育委員会『土下古墳群発掘調査報告書第1集』 1983  
 33 北条町教育委員会『古曲墳群発掘調査報告書』 1981  
 34 鳥取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』 IV、埴輪編 1982  
 35 東郷町教育委員会『津浪遺跡発掘調査報告書』 1974  
 36 東郷町教育委員会『佐美4・13号墳発掘調査報告書』 1979  
 37 倉吉市教育委員会『大宮古墳発掘調査概報』 1979  
 38 近藤哲雄『東伯者における横穴式石室の様相』『鳥居考古学会誌』第4集鳥居考古学会 1987  
 39 東郷町教育委員会『片平5号墳発掘調査報告書』 1977  
 40 鳥取県教育委員会『鳥取県装飾古墳分布調査概報』 1981  
 41 梅原未治『因伯二国に於ける古墳の調査』『鳥取県勝跡地調査報告書』第二冊 1924  
 42 羽合町教育委員会『馬ノ山古墳群』 1961  
 43 治村教育委員会『園古墳群発掘調査報告書』 1990  
 44 鳥取県教育委員会『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』 1984  
 45 真田慶幸『伯耆国大御堂廐寺考』『山陰考古学の諸問題』 1986  
 46 真田慶幸『奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の様相』『考古学雑誌』66-2 1980  
 47 倉吉市教育委員会『史跡大原城跡第2次発掘調査概報』 1988  
 倉吉市教育委員会『史跡大原城跡第3次発掘調査概報』 1991  
 48 倉吉市教育委員会『伯耆国序跡発掘調査概報』第3次・第5次・第6次 1975~1978  
 49 舊吉博物館『伯耆国分寺』 1983  
 50 倉吉市教育委員会『伯耆国分尼寺発掘調査概報』 1973  
 51 佐々木謙・亀井繁人『原始古代編』『鳥取県史』鳥取県 1972  
 52 羽合町『羽合町史』前編 1966  
 53 羽合町教育委員会の御好意により、天正14年河村都・南谷村出畠地統全図を拝見させていただいた。  
 54 羽合町教育委員会『南谷貝塚発掘調査報告書』 1991  
 55 山本清『山陰の須恵器』『鳥根大学開学10周年記念論文集』人文科学編 1960  
 56 田辺昭三『陶邑古窯址群I』 平安考古クラブ 1966  
 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981

表1 国西川遺跡出土土器観察表

遺物番号	出土位置	器種類	法面(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1 S K03	東郷 表面	壺	① 9.4 ② 3.1	小型で火炎部の底がない。縁部は丸い。	内面に化粧した内調軟不規則。	白	良好	内外表面に灰白褐色	CII-1
Po2 S K06	底面	甕	① 29.6 ② 40.0 ③ 20.4 ④ 5.2 ⑤ 3.8	内面は内面乳突に外傾して立ち上がる複合口縦。縁部は厚く、表面に凹凸がある。	内面・口縁部・瓶底ヨコナ。瓶底部・斜方に向むかひバード。	白	良好	外表面・淡黄褐色 内面・淡青褐色 内面・淡青褐色 内面・淡褐色	瓶底外側大土付、外側黒斑。S-1
Po3 S K05	裏	甕	① 16.6 ② 4.3 ③ 3.0	口縁部は外傾傾斜して立ち上がる複合口縦。縁部は厚く、表面に凹凸がある。	内面・口縫部平行沈線後一折ナギナシ。内面・口縫部ヨコナ。	やや白(1mm程度) の石英を多く含む。	良好	外表面・淡褐色 内面・にぶい青褐色	外側スリット付。頭部・瓶底外側大土付、外側黒斑。CII-8
Po4 S K06	甕	甕	① 14.4 ② 3.1	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縦。縁部は厚く、表面に凹凸がある。	内面・ヨコナ。内面・口縫部ヨコナ。瓶底部は下がる。	やや白	普通	内外表面に淡黄褐色	外側スリット付。CII-2
Po5 ピット 群	底面	甕	① 1.0 ② 4.0	四合状の底盤を設置。	内面・ヨコナ。内面・横方向ケズリ。	やや白(1mm程度) の石英・石英を多く含む。	良好	外表面・にぶい青褐色 内面・淡褐色	外側スリット付。CII-4
Po6 盆構外	杯	杯	① 0.9 ② 0.28	杯底部分。	内面・底盤部折り切り底部。	青(砂粒・素面を含む)	良好	内外表面に淡褐色	KK-4

表2 國西川遺跡鐵器觀察表

遺物番号	出土場所	器種類別	残存長(m)	最大幅(cm)	高さ(cm)	形態上の特徴	備考
F 1	ビット 付	鉄板(不明)	2.6		0.1~0.3	薄い鉄板が折り曲げられている。	M-3
F 2		鉄錠?	2.6		0.1~0.3	複数の刃部をもつ鉄錠か。	M-2

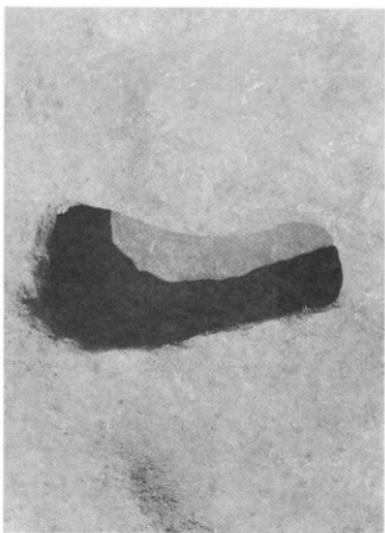
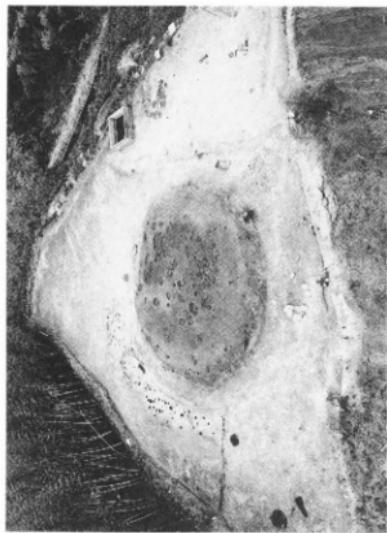
表3 國7号噴出土器觀察表

遺物番号	出土場所	器種類別	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po7	埴生 NW 表土	燒造器皿	①13.4cm ②3.7cm ③11.0cm △2.4cm	口縁部は内凹しながら下へ下る。胎部は不明で二段口登をもつ。天井部との境に不明な複数の刃部をもつ。	外面一口縁部に凹ナデ。天井部のはとんどを回転ケズリ。 内面一回転ナデ。	やや粗(砂粒を含む)、6mmの石英を含む。	良好	内外表面に浅黄褐色 褐色	KR-7
Po8	埴生 NW 表土	燒造器皿	①12.1cm ②2.45cm △	口縫部は内凹して下方へ下る。胎部は二段口登による。	外表面に回転ナデ。	密(0.5mmの石英を含む)。	良好	外底…青褐色 内底…黑色	KR-8
Po9	埴生 NW 表土	燒造器皿	①11.7cm ②2.45cm △	口縫部はやや外反乳突に下方へ下る。胎部は丸い。	外表面に回転ナデ。	やや粗(4mmの石英を含む)。	良好	内外表面に褐色	KR-6
Po10	埴生 NW 表土	燒造器皿	①11.6cm ②2.7cm △	口縫部はやや内凹して下方へ下る。胎部は二段口登による。	外表面に回転ナデ。	やや粗(0.5~2mmの石英を含む)。	良好	内外表面に浅黄褐色	KR-5
Po11	埴生 SW 表土	燒造器皿	①11.6cm ②5.6cm ③1.7cm △	立ち上がりは高くやや内傾し地部は不明確な二段口登をもつ。天井部には水平に引き出す複数の刃部をもつ。	外面一全体的1/2を回転ケズリ。 内面一底部指向する不定方向ナデ。他は回転ナデ。	やや粗(0.5~3mmの石英を含む)。	良好	内外表面に浅黄褐色 黑色	KR-3
Po12	埴生 SW 表土	燒造器皿	②2.9cm	立ち上がりを仄く。天井部はほぼ水平に引き出す。	外表面…強烈回転ケズリ、他は回転ナデ。 内面…回転ナデ。	密(砂粒を含む)。	良好	内外表面に浅黄褐色	KR-12
Po13	埴生 NW 表土	直口壺	①8.3cm ②5.1cm	口縫部は外傾しラッパ状に開く。胎部は不明確な二段口登をもつ。	外面一口縫ナデ。口縫部付近2条の回転が違う。引口ドクシ状工具による形状変化が施されている。 内面…回転ナデ。	密(砂粒を含む)。	良好	内外表面に浅黄褐色 褐色	KR-9
Po14	埴生 NW SW 表土	直口壺	②8.4cm ③13.3cm	胎部を呈す直口壺全体が墨われる。	外面一回転ナデ。片耳1条の回転の下にクレーン状工具による擦痕文。体部下半周方向ハケ目が認められる。 内面…回転ナデ。	密(砂粒を含む)。	良好	外底…灰褐色 底…淡褐色 内底…黑色	KR-10
Po15	表土	壺	①14.8cm ②15.5cm	口縫部は短く外傾して立ち上がる。胎部は丸い。口縫部と胎部の境はぐくわざかに斜めにする。胎部には鉛附形を有する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部…颈部ヨコナデ。颈部以下左方ケズリ。	密(砂粒を含む)。	良好	内外表面に明黄色 褐色	輪郭部外側ス付番 M-4
Po16	表土	壺	①15.5cm ②5.1cm	外腹部の「く」字状口縫をもつ。胎部は厚く丸い。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部…腹部ヨコナデ。腹部右方向ケズリ。	粗(1~4mmの石英を含む)。	やや不良	外底…淡灰褐色 底…淡褐色 内底…青褐色 内底…暗褐色	内面墨脱者 KR-1
Po17	埴生 SW 表土	壺	②2.8cm	外腹部の「く」字状口縫をもつ。胎部を大きく丸くする。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部横方向ハケ目。頸部左方向ケズリ。	密(1~4mmの石英を含む)。	良好	内外表面ににじみ 暗褐色	M-1
Po18	埴生 S E 表土	壺	②1.9cm ④4.5cm	平底を呈す底部。	外面…ヨコナデ。 内面…ケズリ横ナデ?	密(1~3mmの石英を含む)。	やや不良	外底…淡灰褐色 内底…淡褐色	KR-2
Po19	埴生 SW 表土	杯	②2.3cm	やや上凸底乳突の底部から大きく聞く様の底。	外面…回転ナデ。 内面…回転ナデ。	密(砂粒を含む)。	良好	外底…淡灰褐色 内底…茶褐色	内面に触かせる M-1
Po20	埴生 SW 表土	壺	①5.0cm ②2.1cm	蓋入の蓋と思われる。	外面…チ。	密(砂粒を含む)。	良好	内外表面に暗褐色 黑色	KR-14
Po21	7号壙 底土	壺	①16.0cm ②2.4cm 1.5cm	口縫部は短く外傾して立ち上がる複合口縫。胎部は丸い。口縫部下部は深く偏屈する。	外面…口縫部偏い平行側面。 内面…口縫部ヨコナデ。頸部以下左方向ケズリ。	密(砂粒を含む)。	良好	内外表面に橙褐色 褐色	CII-7
Po22	7号壙 10表土	壺	①14.8cm ③4.0cm ②2.3cm	口縫部は手元で短く外反乳突に立ち上がる複合口縫。胎部は手元で握る手形をもつ。口縫部下部は深く偏屈する。	外面…強化の一輪調整不明。 内面…ヨコナデ。	やや粗	やや不良	内外表面に橙褐色	CH-6
Po23	7号壙 10表土	壺	②1.9cm ③3.6cm	平底を呈す底部。	外面…強化の一輪調整不明。 内面…上方ナゼ。	密(1~3mmの石英を含む)。	普通	外底…淡褐色 内底…灰褐色	CH-5
Po24	7号壙 10表土	焼成陶器	④4.5cm	焼成器台上台部と思われる。口縫部は複合口縫を呈し短く外傾して立ち上がる。胎部は丸い。口縫部下部はねむかして下に下し長い突部へ至る。	外面…口縫部手平成焼。胎部以ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。	やや弱	良好	内外表面に橙褐色	CH-3

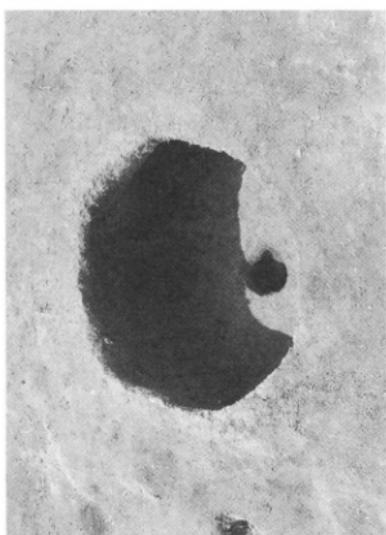
表4 原第2遺跡出土土器觀察表

遺物番号	出土場所	器種類別	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	S SK01 堆土中	不明		粗粒土器破片。	内外表面に横方向二枚貝条痕。	密(1~2mmの石英を含む)。	良好	内外表面に茶褐色	F-6
Po2	塗覆外 付?			わずかに両面する粗粒土器の破片。	内外表面に横方向二枚貝条痕。	密(1~2mmの石英を含む)。	良好	外底…淡褐色 内底…灰褐色	F-4
Po3	塗覆外 付?			粗粒土器の破片。	内外表面に横方向二枚貝条痕。	密(1~2mmの石英を含む)。	良好	内外表面に淡褐色	F-3
Po4	塗覆外 付?			粗粒土器の破片。	内外…横方向二枚貝条痕。	密(1~3mmの石英を含む)。	良好	外底…淡褐色 内底…灰褐色	F-2
Po5	塗覆外 付?			わずかに偏屈する粗粒土器の破片。	内外…横方向二枚貝条痕。	密(1~3mmの石英を含む)。	良好	外底…淡褐色 内底…暗褐色	F-5
Po6	塗覆外 底部		②2.4cm ⑤3.8cm	しっかりした平底を呈す底部。胎部はヨコナデ。底部はスマーリー。	外底…横方向ケロ。底部はヨコナデ。内面…回転ナデ。	密(1mm以下の細砂を含む)。	良好	外底…淡灰色 内底…にじみ暗褐色	M-3
Po7	塗覆外 付?		①11.8cm ②1.6cm	口縫部がやや丸く肥厚しき大きめに外傾する。	外…回転ナデ。	密(砂粒をほんどう含まない)。	良好	内外表面に灰褐色	内面に自然輪かか る。M-2
Po8	塗覆外 不明			厚手で円筒形をもつ。	外…ハケ目。 内…ヨコナデ。	密(1mm以下の細砂を含む)。	良好	内外表面ににじみ 暗褐色	M-4
Po9	塗覆外 瓦質磚		①22.0cm ④4.0cm	口縫部が2段に肥厚する剥離の破片。胎部は平面形をもつ。	内外表面に回転ナデ。	密(1mm以下の細砂を含む)。	良好	内外表面に灰褐色	M-1
Po10	調査区 全般	並・施釉陶	③9.0cm ⑦7.7cm	胎部を呈す底部に横屈する高台をもつ。底部は上げ低いになる。	内面…回転ナデ。	密	良好	内外表面に灰褐色	全面に触かせる F-1

# 図 版



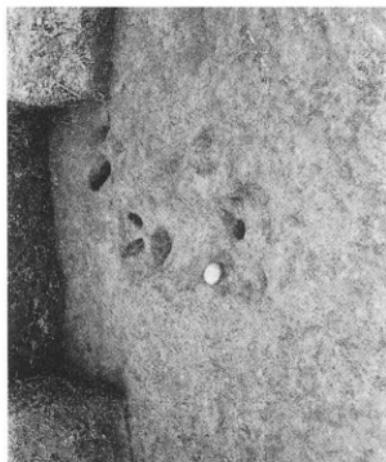
図版 2



園西川遺跡SK04発掘状況(西より)



園西川遺跡SK05発掘状況(北西より)

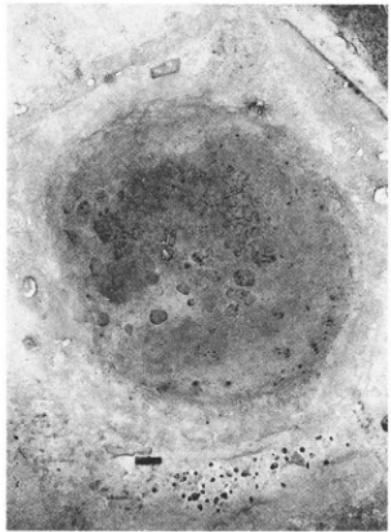


園西川遺跡SK03発掘状況(西より)



園西川遺跡SK06遺物出土状況(北西より)

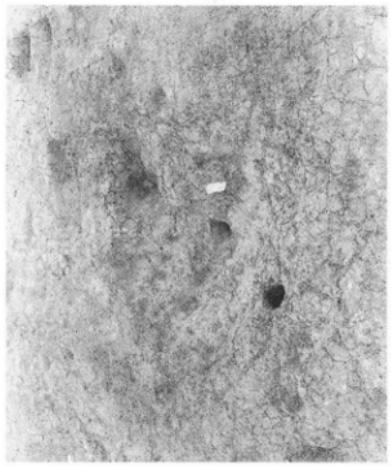
図版 3



園西川遺跡ピット群完掘状況(南西上空より)



園7号墳完掘状況(西より)



園西川遺跡SK08完掘状況(南より)



園7号墳調査前(北より)

図版 4

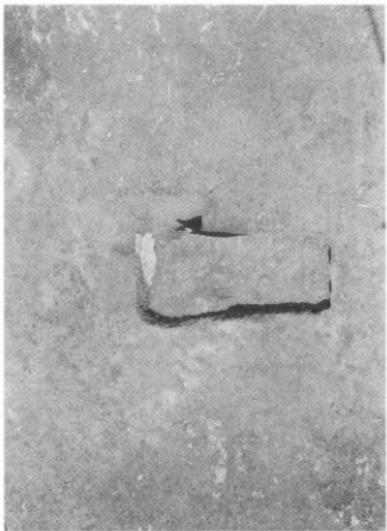


図 7 号墳周溝内埋葬施設完掘状況(南より)

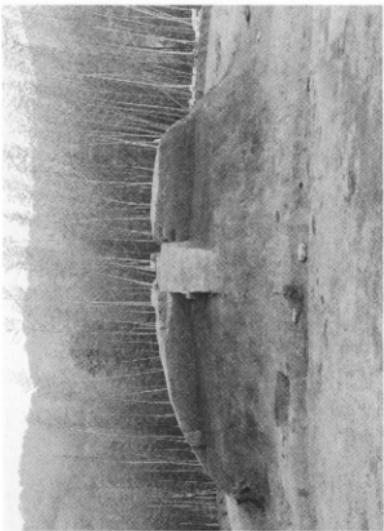


図 7 号墳丘断ち割り盛土状況(西より)

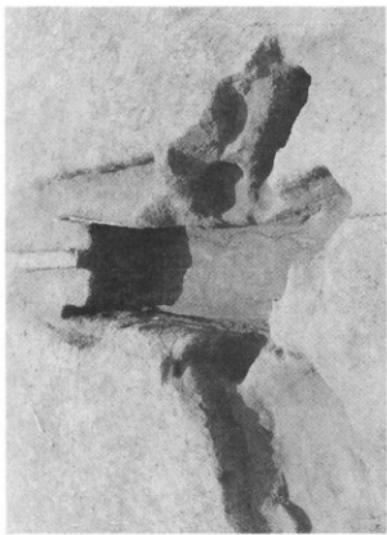


図 7 号墳主体部完掘状況(西より)

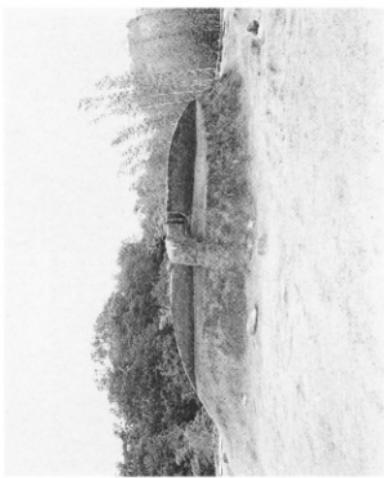


図 7 号墳丘断ち割り盛土状況(南より)

図版 5

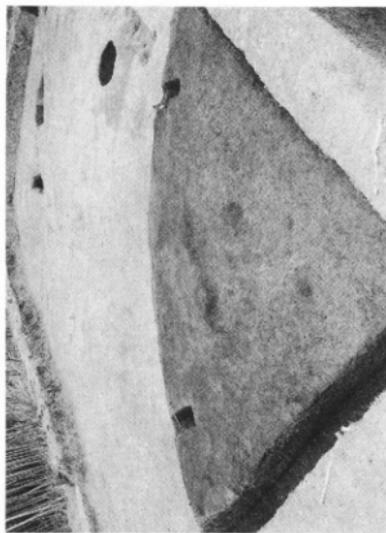


図 7 号填盛土内板石出土状況(南東より)



図 7 号填旧表土面検出状況(南より)

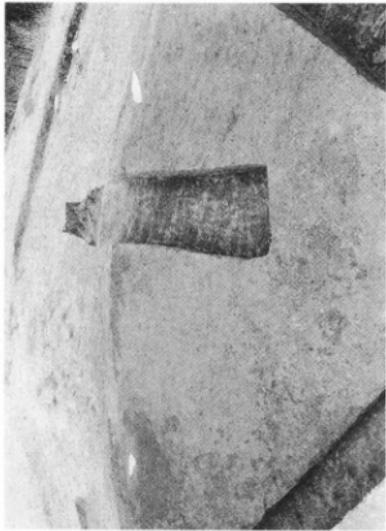
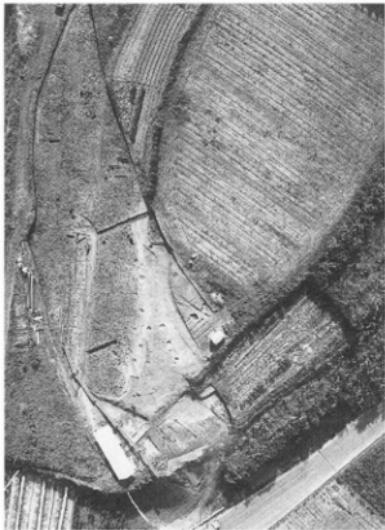


図 7 号填盛土内板石出土状況(南西より)



図 7 号填盛土内板石出土状況土層断面(b-c ライン)(西より)

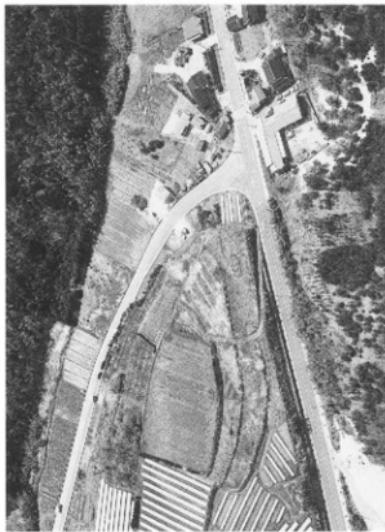
図版 6



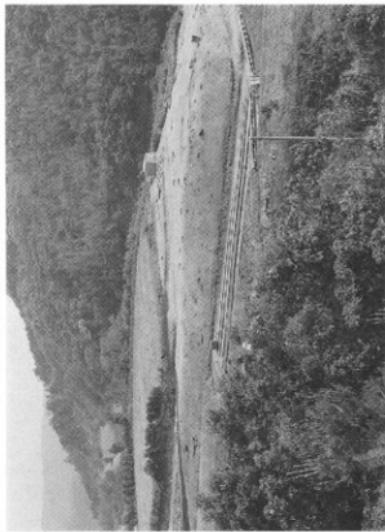
原第2遺跡実地状況(南上空より)



原第2遺跡SK01実地状況(北より)



原第2遺跡調査前(北上空より)



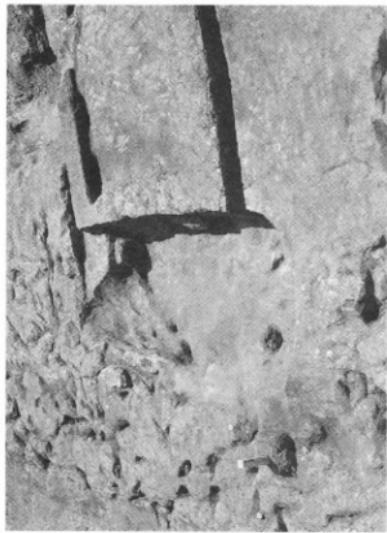
原第2遺跡実地状況(北より)



原第2道跡SS01完掘状況(西より)



原第2道跡SS01完掘状況(西より)

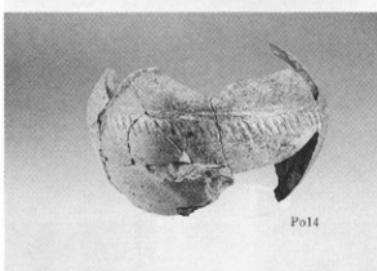
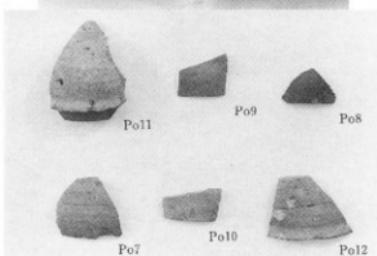
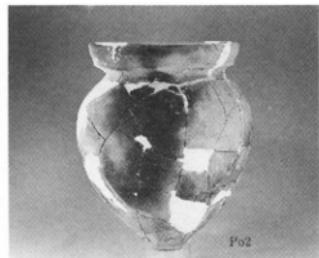
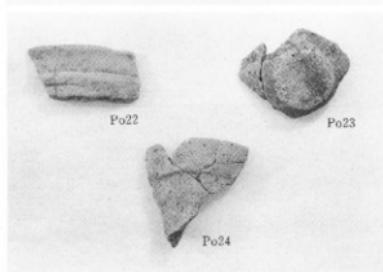
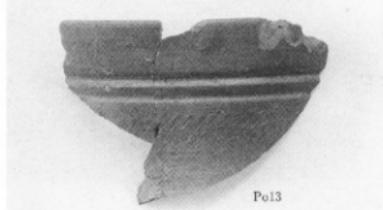


原第2道跡SK02完掘状況(西より)



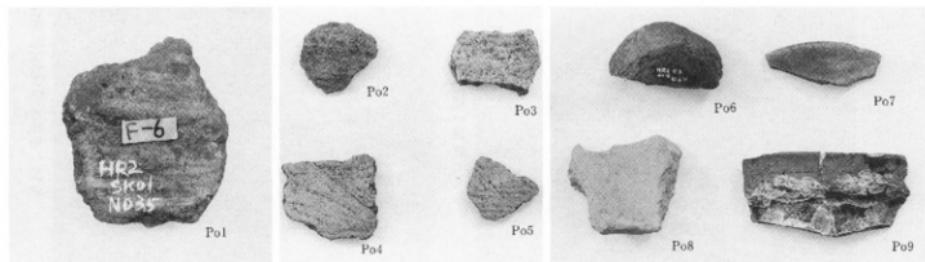
原第2道跡SS01調査区南際土層断面(北より)

図版 8



国西川遺跡SK03(Po1)・SK05(Po2・Po3)

国7号墳(Po7～14、Po22～Po24)



原第2遺跡SK01(Po1)・造構外(Po2～Po9)

鳥取県教育文化財団調査報告書33  
一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書IV  
鳥取県東伯郡泊村

園西川遺跡  
園7号墳  
原第2遺跡

発行 1993・3・31  
発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団  
〒680 鳥取市東町1丁目271番地  
電話 鳥取(0857)26-8397  
印刷 山本印刷株式会社  
倉吉市広栄町971-21番地  
電話 倉吉(0858)22-6171